止めのファンデブ

中等遊民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
止めのファンデブ

【Ｎコード】
Ｎ８５９６Ｖ

【作者名】
中等遊民

【あらすじ】
商業都市として潤う都市国家で徴税吏見習いをしているしがない若者と、その友人で、大商人の依頼で密輸品の護衛を請け負った失業中の傭兵。そんな二人の身近で起きた一件の殺人事件。事件の真相を追う二人ははからずも、領主、教会の実力者、大商人の思惑が交錯する陰謀の渦に巻き込まれてゆく。

プロローグ

フクロウの鳴き声が聞こえた。闇夜の森の中で目に見えるのは、カンテラに照らされた馬の尻と前方の泥道、そして先頭を走る荷馬車の灯りだけだった。

「お前ぇは今までに何人殺した？」

そんなダミ声が荷馬車の後ろから聞こえてきたのは、ちょうどデルブレー山脈の針葉樹林帯から、アグレッサ領内の広葉樹に覆われた〈霞の森〉に入った頃だった。

「俺は今までに八人殺ったことがある。おい若ぇの、鶏一匹締めたことねぇようなツラしてんな？」

ダミ声がゲラゲラと笑った。

「そ、そんなことねぇえよ！　俺だって四、五人殺してたんまり稼いだことがあるぜ」

別の若い声が慌てて否定する。

荷馬車の前席で御者に並んで座っていた筋骨たくましい大男は背中越しにそんなやりとりを聞き、うんざりして頭を掻いた。男の名前はガスコン・パンタグリュエル。ついこの前まで〈誇り高き戦争屋〉と呼ばれていた若き傭兵であったが、昨今の近隣の平和状態すっかり仕事にあぶれ、今ではケチな商人お抱えの用心棒をやっていた。今夜のように商人の密輸品の護衛をしたり、財宝を納めた蔵の見張りをして、わずかばかりの給金を貰い食いつなぐ毎日だ。当然、こんな仕事にはヤクザ者やクズ野郎が多く集まってくる。そんな者達と一緒に仕事をしなければならない今の状況に、ガスコンは小さくため息をついた。

「おい、兄ちゃん。お前はどうなんだ？」

ダミ声が今度はガスコン背中を叩いた。前席で進行方向へカンテラを向けていたガスコンは面倒臭そうに振り返り小声で言った。

「さあな、忘れちまったよ」

話はそれまでだとばかりにガスコンが前に向き直ろうとするその肩を、ダミ声がぐいと後ろへ引っ張った。
「へぇ、言うじゃねぇか。なら、どうやって殺った？　この俺に話して聞かせろ」
どうやら応対の仕方を間違ったらしいとガスコンは思った。本来、周囲に注意しながら通らねばならない森の抜け道でこんな無駄話にふけっていては、とても密輸品を狙う盗賊の奇襲には太刀打ちできない。
　ダミ声の中年の男は、黒い不潔な長髪をふりみだし、前歯の抜けた悪臭の放つ口で、ガスコンに言った。
「その顔の傷も、粋がって自分でつけたわけじゃねぇよな？」
男はゲラゲラ笑い出す。ガスコンの左頬から鼻にかけては、まるで地割れのような傷跡が走っていた。以前戦争に従軍した際に敵の騎士によって斬られた傷だった。向う傷ということもあり傭兵にとっては勲章のようなものだ。本来、場所が場所ならこんな侮辱を言う者は只では済まさないところだが、今は喧嘩ができるような状況ではないので、ガスコンは首を振った。
「ちげーよ。ほっといてくれ……」
　ガスコンは再び前を向き、カンテラの光を進行方向へ向けた。森は深くなってゆき、道は泥もしくは荒い砂利に覆われた地帯にさしかかる。本来、街道を通って西の山地からアグレッサの街に入るには、山のふもとにあるノックス砦を通過しなければならないのだが、砦を通過し石畳で舗装された街道を通るには、馬車や積荷にかかる多額の税を領主に支払う必要があった。特にアグレッサは、内陸部の諸都市と港湾都市ポート・フォリオを結ぶ街道の中継点に位置し、そこを通過する多くの人や物にかけられた多額の通行料と関税によって潤っていた。
　当然、商人たちのなかには、領主による課税を免れようと考える者も多く、知られていない抜け道や獣道を使って交易を試みる者もいる。ただ、人目につかない深い森や山道には、その交易品を狙っ

て盗賊たちがはびこり、道中は危険だった。その為に、商人たちはガスコンのような用心棒を密輸品の護衛に雇っていた。
　今回の彼らの雇い主はアグレッサの経済を手中に収めている、ギルドと呼ばれる商業組合だった。それも、様々な業種のギルドの中で最も力を持つ、アグレッサ領内で物資の運搬の中核を担う、馬車や荷車業を掌握しているギルドだった。これら運送業を支配する大商人達は荷車ギルドもしくは物流ギルドと呼ばれていた。
　今回の仕事はアグレッサの物流ギルドからの依頼だった。やたらと重い大小の木箱計四十箱余りを五両の荷馬車に分けて載せ、アグレッサの西にあるデルブレー山脈を越えた商業自由都市アーロンからアグレッサの街まで、森の抜け道を通って護衛するのが今回の仕事だった。
　霞の森に入ってしばらくして、その名のとおり、あたりは徐々に霧がたちこめてきた。涼しいが湿度が高いこの森は、霧がでることが多かった。ガスコンは舌打ちした。さっきまではっきり見えた先頭の荷馬車のカンテラの灯りが、ぼんやりとしてオレンジ色の鬼火のように見える。ガスコンと御者は後ろの馬車へ振り返る。背後には三両の荷馬車の灯りが、同じくぼんやりと見えた。
「嫌な陽気だな。もっと速くとばせないのか？」
御者は首を振った。
「ここらは道が悪い。下手にとばすと、馬車がひっくり返るからな」
御者の言うとおり石ころ道に入り、先程から馬車自体がガタガタ振動している。
――俺が盗賊ならここで待ち伏せする……　頼むから何も起こるんじゃねーぞ
ガスコンはそう思いながら、腰の剣帯に繋いだカットラスの柄に手を置いた。
　後ろでは先のダミ声がしきりに、犯罪じみたこれまでの『武勲』を自慢し始めた。ガスコンにはこの男の剣の腕など知る由もなかったが、大抵こういうタイプのヤクザ者で本当に剣の腕がいい者は少

ない。恐らくもう一人の若者のほうも見たところ、修羅場の経験したことなど無さそうだった。
この荷馬車にはもう一人、護衛に雇われた無口な男がいた。こういう仕事には慣れている様子で、その落ち着いた様子や使い込まれた腰のブロードソードを見るに、はじめは頼りになりそうだとガスコンは期待したのだが、結局はこの男も頼りにできないと思うようになった。というのも、その男からは絶えず酒の臭いがしていたのだ……
無駄話といい、周囲への注意不足といい、ガスコンは同じ護衛仲間達のあまりの警戒心の無さにうんざりしていた。それは雇い主側にも言えることだった。その証拠に、運搬に使う馬車は弓矢の攻撃を防ぐ盾どころか布の幌さえついていない。何回も密輸の場数を踏んでいるはずの御者もその事を不安がる様子は無かった。仕方なくガスコンは途中の村で廃材だった木の薄い板をもらい、いざという時の盾にするために足元に置いておいた。
「あんた心配性だな。盗賊なんて護衛の頭数さえ多けりゃ、大抵尻尾巻いて逃げてくもんだ」
村から板きれを抱えてきたガスコンを見て御者はそう笑った。
「クソみたいな仕事だが、命懸かってるんでね……」
そう言って御者の言葉を受け流したものの、ガスコンはまだ不安だった。目視が利きにくい夜だからこれでいいようなものの、もしクロスボウの直射を受ければ、こんな板切れでは到底防ぎきれないだろう。
それはちょうど隊列が緩やかな左カーブに差し掛かった時だった。霧の中で前方の荷車の灯りが大きく揺れた。そして、悲鳴と共に前の馬車から誰かが転げ落ちた。何か異変が起きたのは明らかだった。次に、ガスコンの耳は近くで風切り音が鳴るのを捉えた。聞き覚えのある音だ。ガスコンはすぐに身を低くして怒鳴った。
「襲撃だ！　気をつけろ！」
馬車の床から板きれを引っ張り上げないうちに、右隣に座っていた

御者の肩を矢が貫いていた。馬車から落ちそうになった御者を座席にひっぱりあげて馬の手綱を御者のベルトに縛った。
「おい、しっかりしろ。手綱から手を離すなよ！　絶対に止まるな」
「敵襲！　敵襲！」
前後の馬車からも叫び声があがる。前の馬車も後ろの馬車も弓矢による攻撃を受けていた。馬車の左側の車体に矢が二本、音を立てて突き刺さった。攻撃は左手の森の中からだった。前後の馬車の用心棒達は一斉に剣やダガーを抜いて馬車から飛び降りたが、どこからともなく射掛けられる矢によって次々と串刺しになって倒れてゆく。
　先程、四、五人殺した事があると話していた若者は、怯えたような奇声を上げながら腰に差したショートソードを抜いた。
「おい、よせ！」
ガスコンの制止の声も聞かず馬車から飛び降りようとした若者は、あっけなく胸のど真ん中に矢を受けて積荷の木箱の上へと倒れ伏し、ぴくりとも動かなくなった。
「慌てるな！　敵の場所を確かめろ」
ガスコンは足元に置いてあった数本の松明を掴み、カンテラの中に突っ込んで火を灯すと、次々と森へ放り投げた。暗黒の森にオレンジ色の視野がぼんやりと広がる。弓矢の攻撃が弱まり、叫び声とともに木陰から大勢の者がこちらへ突進してくるのが見えた。抜刀した敵の刃が松明のオレンジの炎を反射して光っていた。
　ガスコンは荷馬車から飛び降り、真鍮でできた柄を握り、飾り気のない黒い鞘に納められた細身のカットラスを抜くと、敵へと走り出した。同じ馬車にいたダミ声と無口な男もそれぞれの得物を抜いて敵を迎え撃った。薄闇の中、たちまち金属同士がぶつかる音とともに混乱した白兵戦がはじまった。
　襲撃者は全員、黒い頭巾に黒いクロークを身に着けていた。向かってきた一人がガスコンへ細身のブロードソードを振りおろす。その一撃目をカットラスで弾き、すぐに左手で腰の短剣を抜いた。刀身に櫛のようなの切れ込みの入った、肉厚で頑丈な装飾のない短剣

ソードブレイカーである。敵が横ざまに振りぬく剣をソードブレイカーで受けると、目の前で大きな火花が散った。ソードブレイカーで敵の刃を封じたまま、ガスコンは大きく踏み込んで敵の胴を上から下へカットラスで切りつけた。敵の男は悲鳴をあげて仰向けに倒れる。踏み込みが足らず決定打ではなかったので、ガスコンは止めを刺すべくカットラスを構えるが、視界の左隅に刃の反射を捉え、闇雲に左手のソードブレイカーを振った。

剣に強い衝撃がぶつかる手ごたえと共に、鋭いレイピアの剣先が自分の短剣とぶつかっていた。左拳に鋭い痛みが走る。レイピアの剣先が一度ひっこむと、すぐに次の素早い刺突が繰り出されてきた。ガスコンは間合いを広くとり、敵の突きをかわしながら相手を見た。黒い頭巾で顔を覆い、黒いクロークを羽織った非常に小柄な男だった。右手には金の柄と護拳がついたスウェプトヒルト・レイピアを持ち、左手には刀身が異様に細い刺突用マンゴーシュを防御用短剣として構えている。まるで左手の短剣で弓を引くような姿勢で半身をこちらに向け、両の剣を突き出しすように構えている。

――チビのくせに腕が立つな……

ガスコンはソードブレイカーを前へ突き出し、カットラスを背負うように構えて相手を牽制するが、すぐに横から新手の敵に斬りかかられ両手の剣でその刃を受ける。そのまま敵の腹へひざ蹴りを見舞って、怯んだ隙にカットラスで敵の胸を突き刺す。敵は悲鳴を上げて倒れるが、止めの一撃を加える前にまたもレイピアの小男に側面から襲われた。

多勢に無勢の上に、敵は集団戦に持ち込んできた。このままでは明らかに負けると考え、ガスコンは間合いをとり、敵へ打ち込む振りして脱兎の如く逃げ出した。馬車の近くまで後退すると、そこでは先の無口な男が敵三人を相手に斬り結んでいた。ガスコンはそのうちの一人を背中から一刀両断して、首筋と胸を何回も突き刺して止めを刺し、二人目の敵の左胴を払う。残りもう一人は負傷した仲間を抱え、森の闇へと逃れた。

「す、すまんね……　敵も山賊にしては腕が立つ……」
男は酔っ払っているのか、ふらふらと足元がおぼつかない様子でよろけながら、礼の言葉を述べた。
「馬車が止まっちまった。ここは頼むぞ」
「お、おう……」
ガスコンは荷馬車の御者へ下から声をかけた。
「おい、止まるな！　急いで逃げろ」
さっき矢を受けた御者は血まみれになりながら手綱を握り、道を塞いでいる先頭の馬車を指さした。
「前の馬車が……　御者が、やられた」
苦痛をこらえた表情で御者は言う。先頭の馬車を見ると、松明のかすかな灯りのなかで、数本の矢を受けた御者が馬車の下に転がっていた。
ガスコンは周囲を見回した。同じ馬車にいたダミ声の男が、転がった松明の近くで敵四人を相手にし、まるで狂人のように両手の短剣を振り回している。斬りかかった一人の腹を短剣で突き刺し、助けに入った隣の敵の腕を切って深手を負わせたが、残り二人に斬りつけられて木の根元に倒れるのが見えた。無口な酔っ払い男が加勢せんとばかりにそこへ走っていった。
「このままじゃ皆殺しだ。俺が前の馬車を動かす。一気に突っ走るぞ」
ガスコンはそう言って細い道を塞いでいる先頭の荷馬車へと走り出した。一両目の馬車の護衛達は全滅し、敵の一人が荷馬車の手綱を手にしたところへ、背後からガスコンが襲い掛かった。ガスコンは一人を馬車から蹴り落とし、手綱を握っていたもう一人の頭をカットラスで叩き割ると、馬の手綱を取った。馬車馬の扱いなど判らなかったが、とにかく馬の尻を何度も手綱ではたくと馬はゆっくり歩き出し、しだいに走り始めた。すると森からホイッスルの音が聞こえ、それまで斬り合いを繰り広げていた黒衣の襲撃者達は、負傷した仲間を連れて森の奥の方へと退却をはじめた。

――た、助かったか？

ガスコン達はその隙に負傷した仲間達を荷馬車に担ぎ上げると、なんとか安全な場所まで馬車を走らせ、危機を脱する事ができた。

アグレッサの徴税吏

雨は早朝からアグレッサの目抜き通りに敷かれた石畳を叩いていた。ウェルテ・スタックハーストの羽織る深緑色に染めた羊毛フェルトのクロークには雨水が染み込み、どんどん冷たく重くなっていく。今日は珍しく、モービル街道と呼ばれる街中心部の目抜き通りでも、人や馬車の往来はまばらだった。ウェルテは止め処なく落ちてくる鼻水をよれよれのハンカチーフで何度も拭いながら、領主館の西にある徴税役場まで歩き出した。

広いモービル通りに面する徴税役場はゴシック造りの四階建ての建物で、多くの市民や近隣の農民が納税や負担に関する相談のために列を作っていた。特に農村部では生産物を貨幣に替える手段が少ないため、なんとか租税を物納で済まそうとする多くの農民が鶏や豚を連れてやってくる。その処理のため、役場の一階の受け付け場は毎日大混乱だった。

そんな納税者達の列をかきわけてウェルテは建物へと入り、奥の職員の詰める広間へとやってきた。オイルランプの灯る薄暗い広間に入り、びしょ濡れのクロークと白い羽毛飾りのついたフェルト製の黒いキャバリアー・ハットを帽仕掛けに掛け、ウェルテは寒さで身震いしながら空いている椅子に腰をおろした。不意に大きなくしゃみとともに、鼻水が飛び出す。周囲の者がギョッとした表情でこの小柄な若い男の方を見た。風邪引きはどこでも嫌われる。なぜなら、命にかかわる流感と区別がつかないからだ。

「だ、大丈夫だ。只の風邪……」

慌てて鼻水を拭って弁解するが、皆眉間に皺を寄せて首を振った。

鼻水をすすりながら、ウェルテは今日の集金の訪問先を記した羊皮紙をなめし革の物入れから取り出した。今日は、歩いて片道二時間半かかる荘園の粉挽き場まで税の取立てに行かねばならなかった。

「いよう、ウェルテ。さてはその鼻水、もしや流感か？」

「だから風邪だって……」
後ろから声を掛けてきたのは、同じ徴税吏見習いの同僚であるサリエリだった。太った丸顔にボサボサの頭、愛嬌のある細い目に笑みを湛えて、サリエリはウェルテの隣にドサリと座った。
「ただ、頭はガンガンだし、とても寒いんだ」
「今日はどこをまわるんだ？」
憂鬱な顔でウェルテは羊皮紙のリストを見せる。
「霞の森の方か……　お前はロバを持っていないしなぁ……　実は俺も今日、森の方へ行かなきゃならないんだ。ついでに行って来てやろうか？」
「え、いいのか？」
ウェルテは驚いた。
「その代わり、治ったらぶどう酒を奢れよ。それにな、実は会いたい村娘がいるんだよ」
にやけて言うサリエリの言葉にウェルテは露骨に嫌な顔をした。
「やっぱり、そんなことだろうと思った……」
サリエリはお世辞にも美男という風貌ではなかったが、人懐こい無邪気な性格のため男女問わず人気があり、特に農村部の娘達によくモテた。それはサリエリから税を取り立てられる側である農民も例外ではなく、行く先々の村で彼は歓迎された。なぜなら、彼は農民達の為に時々仕事をサボることがあり、税にからむ問題では極力相手に無理が無いよう便宜をはかってやることが多かった。領主による重税に苦しむこの領内では、とても大切なことだった。
「とにかく、今日はゆっくり寝て早く風邪を治せ。ぶどう酒が楽しみにしとくぞ～」
そう言ってサリエリは羊皮紙を懐のポケットへしまうと、鼻歌を歌いながら、クロークと帽子を手に部屋を後にした。
　今日の仕事が無くなったので、ウェルテは周囲の同僚達に声を掛け、クロークを羽織って外へと出た。
　ウェルテは極力冷たい雨に当らないよう小走りで、モービル街道

と呼ばれる大通りを南へ下る。アグレッサ城から南へしばらく歩くと左手に大きな鐘楼を持った教会が見えてくる。教会の左手には大きな石畳の広場があり週に二度、大市が立つ場所だ。ウェルテは広場を突っ切って東へと向かう路地へと入った。この辺は都市の一般市民が住む居住区が多い。路地は石畳で舗装されていない為、ぬかるみと水溜りだらけだった。ウェルテは水溜りをよけながらしばらく進み、三階建ての白壁の半レンガ、半木造の建物の前で足を止めた。屋根から伸びた煙突からはうっすらと煙が昇っている。ジョッキと羊をあしらった鉄製のレリーフがかかる木のドアを押すと、室内の暖かさと来客を知らせるベルの音がウェルテを迎えた。

「おやウェルテ、いらっしゃい」

バーカウンターの向うから大柄な茶色い髪の若い女、ロクサーヌがウェルテに挨拶した。相変わらずいつ見ても魅力的な女性だとウェルテは思った。はっきりした目鼻立ちや茶色のカールした長い髪、そして痩せすぎない豊満すぎない魅力的な体型は、多くの男達の人気を集めている。

「やぁ、おはよう。食事に来たんだ」

今朝のカウンターには先客が居た。色白で小柄なウェルテとは対照的に、大柄で日焼けした肌は荒々しさを感じさせ銀色の髪を短く刈り込んだ男、ウェルテの剣術修行時代からの旧友であり、この居酒屋兼宿屋の女主人が誰よりも愛する傭兵のガスコン・パンタグリュエルが、椅子の上で自分の足に包帯を巻いていた。

「なんだ、戻ってたんだ。久しぶりだな」

ウェルテがひどい鼻詰まりの声で尋ねたので、ガスコンとロクサーヌは顔を見合わせた。

「もしかして流感……」

「いや、ただの風邪だから……」

ウェルテはそう言って帽子とクロークをとり、帯剣ベルトから銀の柄のレイピアを抜いて壁に立てかけた。

「温かいものをくれる？」

「今、芋のスープを温めるから待ってて」
ロクサーヌはそう言ってカウンターの奥にある厨房へと下がった。
ウェルテはカウンターの椅子に腰掛けた。
「用心棒の仕事はどう？　今回も無事に済んだみたいだな」
冗談じゃないとガスコンは首を振った。
「確かに大きなケガはしなくて済んだが、二十人いた護衛のうち七人が死んで、四人が瀕死だ。こんな酷い仕事は初めてだぜ」
ガスコンは、今朝依頼主の蔵まで無事に密輸品を運び込んだ事、そして瀕死の重傷者達を床屋（大昔、床屋は医者を兼務していた）へ担ぎ込んだ事などをウェルテに話して聞かせた。
「だから、抜け荷の護衛はヤバイからよせって言ったんだ。それにしても、盗賊も怖いなぁ。大損害じゃないか」
ウェルテは鼻をすすりながら感心したように言った。
「のん気な事言いやがって。こっちは危うく死にかけたんだぞ。だけどな……」
「ん？」
ガスコンは木製のコップに注がれたエールを一飲みした。
「なんとなくなんだが、襲ってきた奴等、盗賊らしくねぇんだよ……」
「らしくないって、何が？」
「山賊どもの持ついい加減さつーか……　うまく言えねぇけど、武器にしても剣さばきにしても、妙に落ち着いていやがる。戦場で正規の騎士や兵隊とやり合った時みたいだ」
ウェルテはハンカチで鼻を拭いながら返す。
「でも今更、盗賊に身を落とす騎士や兵隊なんて珍しくないだろ」
ガスコンは左手の甲にできた裂傷にすり潰した薬草を当てながら首を振った。
「そうなんだけどよ……　やつらは皆、正規の剣術訓練を受けた野郎ばかりだったんだ。この傷だってやたら剣筋の素早い小僧にレイピアでやられた」

「レイピアか……　それは確かに珍しい」
レイピアは多くの一般市民が腰に差した護身用の細い剣だ。いざ実戦をという場では兵士の予備の武器として位置付けられ、攻撃用武器の主力として用いられることは少なかった。盗賊のようにはじめから戦いを想定するのであれば、歩兵用の両刃剣であるショートソードやブロードソード、もしくは船乗りや海兵が好んで使う片刃のカットラスといった、より丈夫な種類の剣を使うほうが自然だった。
　厨房からロクサーヌがジャガイモを煮込んだスープと硬い黒パンを持ってきた。ウェルテは木のスプーンで、湯気の立つ白いどろどろのスープをすくい、口に含む。塩味ともっさりとした芋の甘味が口内に広がった。
「きっと僕らみたいな奴が山賊になったんだよ」
硬く乾燥した黒パンをちぎりながら、ウェルテはそう言って自分達の剣術修行時代を思い出していた。
　ウェルテは、アグレッサの北東に位置する商業都市プラムベリーの出身だった。街で公証人を勤める父親のもとに生まれたウェルテは、平凡な中流都市市民として育ってきた。そんな彼が一つ年上の孤児であるガスコン・パンタグリュエルと出会ったのは十三才の時だった。
　当時、プラムベリー領主は自分の子女や配下の騎士達の為に、高名な武芸者であり戦術研究家でもあったレスター・ヴァンペルトを武術の指導顧問として招聘した。極めて優秀な剣士であったが非常に変わり者でもあったヴァンペルトは、騎士達の訓練の合間をみては市内に繰り出し、街の子供達相手に捧切れでチャンバラごっこの相手をしてやったり、身を守るための剣術の手ほどきをしたりして過ごしていた。ウェルテもヴァンペルトに遊び相手になってもらった子供の一人だった。元々ウェルテは昔の騎士道物語に憧れ、古い英雄譚の読み物ばかりを読んでいたので、棒きれを手にヴァンペルトにくっついて歩き、あれこれ質問ばかりしていた。
　ウェルテが十三才の時、ヴァンペルトはウェルテをプラムベリー

城内にある広場へと連れて行った。そこには二人の同年代の少年がいた。一人はブロンドの髪を伸ばし、真っ白なカラーシャツに優美な半ズボンと高価なタイツを履いた、見るからに貴族然とした美少年で、急に現れたウェルテを値踏みするような目で見つめていた。もうひとりは銀色に近い短髪のたくましい少年で、荒く織った、ほころびだらけのチュニックを着ていた。どうみても城で剣術の稽古が受けられる身分には見えないその少年は、貴族でも農民でもなさそうなウェルテにどう接しようか悩んでいるような顔で見つめていた。これが、ウェルテとガスコンの初めての出会いだった。

「暇な時間に息子に剣術の稽古をつけてくれと、とある貴族に頼まれたんだがな。相手が子供一人だと、どうもやりにくくてかなわん。そういうわけで三人まとめてやることにした。各々に最も必要な稽古をつけてやる」

このことについて貴族の少年はなんだかんだと文句を言っていたが、ヴァンペルトは笑いながら自分のあご鬚をなでてその声を受け流している姿を、ウェルテは昨日の事のように思い出した。

「ヴァン先生は、今どうしているかなぁ……」

ウェルテはスープを飲み干すとつぶやいた。

「先生の事だ。どーせまた子供相手にチャンバラごっこでもしてんじゃねーかな。ひょっとしたら、北部の異端者達に稽古でもつけてるかもな」

ガスコンはカットラスを鞘から抜き、血で汚れた刀身をボロ布で磨きながら言った。北部では宗教を巡る紛争が激化し、宗教的異端者に対する恐ろしい弾圧が行われているという噂話がアグレッサにまで届いていた。

「あたしも信心深いほうじゃないけどさぁ、教会もえげつないことすると思うわ」

そう言ってロクサーヌがウェルテに温かい茶を渡した。

「おい！　気をつけねーと、もし祭司にでも聞かれたらヤバイぞ」

あわててガスコンがたしなめるが、ロクサーヌは関係ないとばかり

に首をふった。
「何言ってんの。教会のお偉いさんがこんなところに来るわけないよ。それにしても最近の救済税、ちょっと上がりぎだとは思わない、ねぇウェルテ」
教会へ納める救済税はそれぞれの領主を通して宗教都市グライトの教主へと納められる。その領主の元で直接、税を取り立てるのはウェルテのような徴税吏だった。ウェルテも困惑顔でお茶をすする。
「こっちも困ってんだよ。今年は麦も不作で価格も倍増、それなのに教会に納める救済税も倍増。今年はちょっとまずいよ。役場も取り立てに手加減してるけど、領主に対して取立て額を誤魔化すのはもう無理みたいだ。下手するとこの冬は餓死者が出るかもしれない」
徴税役場も、今のまま重税が続けば大量餓死と疫病もしくは農民一揆が起こることは判っているので、あの手この手で領主へ納める額を誤魔化してきていたが、領主による締め付けは一層厳しくなり、役場の努力にも限界が訪れていた。
「そういえば、今回の抜け荷の依頼主は一体誰だったんだ？　そいつも税金払いたくなかったんだね」
「ああ、もちろん知らされちゃいないが、荷主は間違いなくオストリッチ商会だ。盗み見た引渡し証文に、足のひょろ長い怪鳥の紋が描かれてた」
「オストリッチって……　荷車ギルドの組合長じゃないか！」
アグレッサ領内で何か物の運搬を行う場合には、必ず領内の物流を支配しているアグレッサ荷車ギルドに加盟している運搬業者に依頼しなければならなかった。そのなかでも最大の資本とシェアを誇っているのがオストリッチ商会だった。オストリッチ商会はギルドの組合長を務める豪商で、アグレッサの経済を半ば支配しているとも言われていた。その街一番の豪商が脱税の為に密輸をしていたというのだ。
「くれぐれも俺から聞いたなんて言うなよ。俺の仕事も信用が第一なんだ」

「ハハハハ、心配いらないよ。僕みたいな下っ端に、あんな大物商人を告発するなんて無理だね」
心配するガスコンをウェルテは笑う。徴税役場で仕事をしているウェルテとしては、悪徳商人に対し本来なら怒りを感じるべきなのだが、この時代、欲深い商人達の間ではそんな事は当たり前なので、苦笑いすることしかできなかった。
「ガスコン、一層二人で山賊でもはじめようか？」
スープとパンを食べ終えたウェルテは、ふざけて言った。
「剣の腕はともかく、威圧感の無いお前の体格じゃ山賊は無理だろ。それに、見栄張ってまだそんな踵の高いブーツ履いてるのか？」
ガスコンは呆れながら、横からウェルテの底上げしたブーツの踵を軽く蹴った。カウンターの奥で皿を拭いていたロクサーヌが思わず吹き出す。ウェルテが睨むと、ロクサーヌは口元をおさえながら慌てて厨房へと逃げていった。
「ところで次の仕事は決まっているのか？　いつまでここにいる？」
ガスコンは首を振った。
「契約は今回で終わり。また仕事見つけねーと……　今回だって命懸けの仕事で、たった五十シルバの稼ぎだ」
ガスコンはそう言って皮袋からわずかばかりの銀貨を出して見せた。
「そうか……　じゃあ僕はそろそろ帰って休むよ。もし遠くへ旅立つなら、その前に一声かけてくれ」
ウェルテはそう言うと、腰のベルトに吊るした皮袋から銅貨を数枚出してカウンターに置いた。
「ロクサーヌ、ご馳走様」
「ああ、もう帰るのかい？　お大事にね」
厨房からロクサーヌが手を振った。
　ウェルテはクロークと帽子を身に着け、ロクサーヌの酒宿を出た。雨はまだ止む気配がない。ぬかるんだ泥道からモービル街道へと出ようとするとき、辻の右側から真紅のマントを羽織ったプレートメイル姿の騎士達に先導されて、黒塗りの高級四輪馬車が水を跳ね上

げながら通り過ぎ、領主館の方へと走り去った。ウェルテは馬車が撒き散らした泥と水しぶきをクロークで防ぎながらその過ぎ去る馬車を見送った。

ウェルテは悪態をつきながらも、せっかく食事で温まった体が冷えてしまう前に寝床へつくため、自分の下宿へと足を急いだ。

神のものと剣のもの

ウェルテの眼前を通り過ぎた黒塗りの馬車は街の中心部にある領主館〈アグレッサ城〉の城門を越えて、芝の生い茂った大きな館のエントランスに止まった。すぐに館の使用人達が整列し、馬車のドアを開ける。馬車の中から、フォルス教会の赤いゆったりした法衣に身を包んだ姿勢の悪い色白の小男がサイドステップに降り立つ。館からは、鮮やかな金糸に彩られた上着に半ズボンとタイツを着た背の高いがっしりした中年の男が歩み出て、笑みを浮かべて恭しく頭を下げた。

出向えを受けた法衣の男、宗教的権威をもってこの大陸を支配するフォルス教会の幹部聖職者であるドミニク・ホルヘ祭務官は両手で印を結んでその場にいた者らを祝福した。

「ようこそ祭務官様、遠路はるばるこのアグレッサまで、よくおいでくださいました」

出迎えた男、アグレッサ公フランツ・ド・ゾロッソは祭務官の手を引き、館の中へと招き入れた。

アグレッサの領主であるフランツ・ド・ゾロッソの居館であるアグレッサ城の応接室は、館の二階南東の角にある。壁は漆喰と化粧板におおわれ、天井からは高価なシャンデリアが吊るされた、開放感と清潔感のある広い部屋だった。室内には安楽椅子や高価な諸外国の調度品が並び、アグレッサの豊かさを誇示している。

白い漆喰の塗られた壁には、大きな布製の地図が掛かっていた。アグレッサを中心に、この大陸の東側を描いた物で、周囲に多くの都市国家諸国の場所と地名、それに街道が記されている。地図の右端、すなわち日の昇る東側は大洋を示す青で塗られている。海と陸地の境界にひときわ大きく名前が書いてある街が大港湾都市であるポート・フォリオである。ポート・フォリオから西の内陸平野部へは大きな街道が一本伸びている。その道はいくつかの関所を越えて

アグレッサに繋がっている。さらに道はアグレッサから南北と西へ伸びている。内陸の国や街がポート・フォリオへアクセスするには必ず、アグレッサを経由することになっていた。
一方、アグレッサから南へ伸びた街道は幾つかの関や砦、都市国家を経由してフォルス教の教主が住まう宗教都市グライトへと繋がっていた。反対に、北方に伸びた街道は幾つかの都市国家を経由して枝分かれし、北部の大穀倉地帯を治める国々へと伸びていた。
アグレッサ公フランツは、グライトの街から訪れた教会の実力者であるホルへ祭務官をこの応接室へと連れてきた。二人は向かい合わせに安楽椅子に座ると、給仕係の者がすぐにガラス製の高価なグラスとデキャンターに入ったぶどう酒をもってきた。酒が注がれ、もてなしの軽食がサイドテーブルに置かれると、館の主は召使い達に退室を命じた。
ぶどう酒を一飲みし、ホルへは安楽椅子へとふんぞり返った。
「フランツ、教主様は汝の毎年変わらぬ救済税の納付に大変感銘を受け、喜んでおられる。近頃の領主どもときたら、飢饉だ干ばつだと言い訳を並べ、聖なる救済の為の出資を渋っておる。呆れ果てて二の句もつげん」
フランツは狡猾な笑みを浮かべてうなずいた。
「御意。まったく神を恐れぬ所業、この私めには理解できかねます」
猫背の祭務官は椅子に深く腰掛け横柄に足を組むと、グラスに満たされた高価なぶどう酒をグビグビと飲み干した。
「特に、教主様はまだこの大地で異端者や異教徒が、我々同様に息をして日々を過ごしている事に、大層お心を痛めておられる。近々、再度の異端討伐のための宗教令を発布されるお心積もりだが……そのためには諸国領主しいては信徒全員の一層の助力が不可欠だ。判るな？　フランツ」
「はい、私も同じ考えで御座います」
フランツは祭務官の杯にぶどう酒を注ぎたしながら同意した。
「さらに教主様は、信徒達の死後の魂の救済をより確かなものとす

る為、グライトの大聖堂の拡張工事をお考えだ」
「なんと素晴らしい。建設開始の暁にはアグレッサからも選りすぐりの大工達を派遣致します」
フォルス教の教典には本来、大聖堂の規模と魂の救済に因果関係があると記した箇所は存在しなかった。これまでに、この事実を一部聖職者や神学生が公の場で指摘してきたが、彼等は全て教主より異端者の宣告を受け、火刑台の灰と消えていった。
「ところで、祭務官様……　異端者の討伐にあたり、例の件に関して、教主様はいかがお考えでしょうか？」
フランツは声のトーンを落として、囁くように尋ねた。祭務官はワインを満たしたグラスを揺らしながら壁に掛けられた大きな地図へと目をやる。
「判っておる……　教主様は、善きに計らえと仰せだ。事が万事済んだ後、教主様は汝の行動を正当と宣言され、追認なさるそうだ」
祭務官はそう言って、地図の上部に位置するある都市国家の地名を見つめた。それは広い穀倉地帯と北部の山地を領土として有する都市国家で、良質な小麦の産地として有名なグレープスの街だった。
「グレープス公め……　凶作の為とうそぶき、今年は救済税を教会規定の半分しかグライトへ送ってよこさなかった。それだけでも許されないというに、あの領主は北部に逃れた異端どもを討伐するよう命令を下しても、従うどころか異端者に居住権を与え保護しているというではないか。この事には教主様も大層お怒りだ」
酒のせいか、ホルへはだいぶ饒舌になってきた。
「フランツ、準備の方はどうなっておる？　もしも失敗すればお前だけではなく、この私まで窮地に立たされる事になる」
アグレッサ公は男爵ひげをひきつらせて、笑った。
「ご心配には及びません。手筈は整っております。グレープスは間もなく収穫の時期を迎え、祭りの準備が始まっています。我々はある旅芸人の一座を雇いました。我が精鋭の兵士や騎士達をその芸人の一座に紛れ込ませてグレープスの市中へ送り込みます。祭りの間

は、市民だけではなく警備の騎士達も浮かれ騒ぎ、防備は手薄になります。その隙に我が兵士達が城門や市門を押さえ、街の付近に潜ませていた本隊を城内に引き入れてグレープス公を倒す計画です。その直後、私が直々にグレープスへ赴き、神の名においての天誅をなした事を宣言いたします」
フランツの説明に、祭務官はうなずいた。
「あの街の軍は決して強力ではないが、グレープスは非常に豊かな街だ。それに騎士達の結束は固いと聞く。油断してかかるでないぞ」
「ご心配には及びません。商人にアーロンの街から最新の武器を取り寄せさせました。準備は最終段階に入っております」
フランツは地図を指さしながら言った。
「グレープスを攻略した暁にはホルヘ様を通して、教会へ今の三倍の救済税をお納め致します。さすれば教会の次期祭務長の座もホルヘ様の手に……」
フランツの言葉を祭務官は咳をして打ち消した。
「フランツ、声が大きいぞ」
「これは失礼を致しました」
　その時、オークでできたドアがコツコツと音を立てた。フランツが入室を命じると、背の高い痩せた男、アグレッサ城で領内の事務・管理を一手に担う家令のジョバンニ・ペレスが入ってきた。
「旦那様、ガイヤール騎士隊長が至急ご報告したい事があると、参っております」
「わかった、すぐ行く。祭務官様に新しいぶどう酒をお持ちしろ」
フランツは家令にそう命じて席を立った。

友の死

暑くて目が覚めた。寝間着は汗でびしょ濡れだった。ウェルテは寝台から身を起こし、板張りの床に足をついた。窓にはめた鎧戸の隙間からかすかな光がもれていた。まだ夜にはなっていないようだ。立ち上がると、体は軽く、頭痛も感じない。鼻水だけは相変わらず落ちてくる。風邪はほぼ回復したようだった。寝間着を脱ぎ捨て、洗濯し虫がつかないように煙でいぶした白い木綿シャツとズボン、厚手の毛織物の上着を着て、その上から剣帯を腰に巻く。衣装箱に立てかけたレイピアと十字型のマンゴーシュを剣帯に差した。街中では、護身の為にレイピアやスモールソード、短剣など、最低限の武器の携帯は認められていた。

ウェルテはキャバリアー・ハットを手にすると、汗で濡れた寝間着を抱えて階下へと降りた。一階の厨房では大家のおばさんが夕食の準備にとりかかっていた。

「もう動いて大丈夫なのかい？」

「お蔭さまで。洗濯物置いときます」

そう言ってウェルテは洗濯用の樽に寝間着を放り込み、外へと出た。

雨はもう止んでいた。泥と水溜りだらけの細い路地を縫って、大通りへと向かった。石畳の街道は、東西南北から集まった荷馬車の列や行商人の往来で一杯だ。広場では小売専門の商人達によって仮設の市が開かれ、東西南北の文物と人々でごったがえしていた。

人波をかきわけ、ウェルテは今朝訪れた徴税役場の前へと再びやってきた。朝にも増して、役場の前には多くの農民や職工達が詰め掛けている。応対するカウンターは戦場さながらだ。

「お役人様、お役人様、今年の小麦はみんなイナゴにやられちまいました。替わりにオート麦と子豚一匹でなんとか手ぇ打ってくださらんでしょうか？」

「うわぁぁぁ、判ったから、と、とにかく子豚をカウンターにのせ

ないで！」
一方、その隣では。
「俺の織ったこの上物タペストリーじゃあ足りねぇなんて、あんた。さては、金勘定はできても品物には目が利かねぇな？」
「なら、これを裏の両替商か質屋に持っていけば金に替えてくれますよ。どうします？　これ、ギルドを通しては売ってはいけないキズモノでしょ？　連中がここの査定以上で買い取るとは思えませんがね」
役場の職員と納税者達の攻防が行われている横を通り抜け、ウェルテは広間へと入っていった。
　広間では同僚達が、現金や物納された穀物や毛織物の仕分けや徴税目録の乗った貢租簿を整理に追われていた。ウェルテは自分の代わりに出掛けていったサリエリを探したが、広間には見当たらなかった。ウェルテは近くで銀貨の枚数を数えている同僚にたずねた。
「あの、サリエリは見ませんでしたか？」
「いいや、朝から見てないな」
ウェルテは首を傾げた。日没までもうそんなに時間がない。それに、サリエリは自前のロバを持っている筈なので、ウェルテよりもずっと速く移動できるはずだ。ウェルテは、サリエリが村娘と遊んでくると話していたことを思い出したが、それを差し引いても遅すぎた。
　ウェルテは、部屋の奥で計算尺を手に指示をとばしている老人のもとへ行った。
「反物は今日中に商人の所で貨幣に換えてくるように。交換手数料は七分までだぞ。それ以上は絶対に払ってはいかん。次！　なにに、ヒヨコが七羽生まれたのか？　たしか、この農家は滞納分も含めて五割徴収だ。三匹と半分のヒヨコを受け取るように、次！」
「先生、は、半分って……」
　白髪交じりの髪を辮髪にして黒いリボンで結び、眉間に鼻眼鏡をのせた、痩せた老人は、驚異的な事務処理能力で部下達の質問に答えてゆく。老人の名はルイス・アカバス博士。アグレッサの徴税代

官として、領主の為に日々領民から租税を搾り取る職務の責任者だった。
「ん？　……確かにヒヨコを半分にはできんな。ええと、雌鶏の卵を週に三個づつ十週間納めるように、次！」
ただ、代官という職務にも関わらず、アカバスは慈悲深い感性と非常に合理的な頭脳の持ち主だった為、領内が不況の時には課税額の見積もりを甘くしたり、取立ての際にわざと鯖を読んで物品を徴収し市民や農民を助けたりしていた。それ故、役場で働く者や市民は尊敬の念をこめて彼を先生と呼んでいた。
「あの先生、実はサリエリの件で……」
羽根ペンをインク壷に突っ込んだところでアカバス博士の手が止まった。
「スタックハースト、一体サリエリがどうした？」
ウェルテは、自分が風邪を引いたこと、サリエリが仕事を代わってくれたこと、その彼がまだ戻ってきていないことを手短に話す。アカバスは羊皮紙の束に視線を戻し、急いで羽ペンを動かしはじめた。
「サリエリめ、またサボりか……　こんどガツンと言ってやらねばならん。事情は判った。とにかく、お前は風邪を治すように。今日はもう帰ってよろしい。次！」
ウェルテはアカバスに礼を言って下宿へ帰ろうとした時、広間の同僚達がざわめき、部屋の入口を凝視した。
　深みのある青いクロークと、青い羽飾りをのせた黒い三角帽を身に着けた男達が広間に入ってきた。どの街でも、三角帽は上級の役人や領主の家来達の正装として用いられている事が多かったが、ここアグレッサでは、青い羽飾りのついた三角帽には特別な意味があった。入ってきた男達はこの街の警察権を持っていることを示す為に、樫でできた長い警杖を握っている。その服装から通称〈青騎士隊〉と呼ばれ恐れられる、領主お抱えの軍事組織だった。
「ルイス・アカバス博士ですね？」
先頭の筋肉質の男が野太い声で聞いた。

「いかにも……　青騎士隊が一体何の御用かな？」
アカバスは眼鏡を直しながら相手を睨みつけた。
「確認して頂きたいことがあります。外まで、ご足労願えますか？」
男は威圧的にアカバスを見下ろした。
「先程、霞の森の入口で男が刺されて死んでいるのを見つけました。持ち物や容貌から、もしや徴税役場で働く者かもしれないと……」
ようやくアカバスは、羽根ペンをスタンドに挿して立ち上がり、自分の三角帽を頭にのせた。隣で話を聞いていたウェルテも嫌な予感に襲われ、青騎士達の後について役場から飛び出した。
役場の前には、青騎士隊の男達に囲まれた一台の荷馬車が止まっていた。アカバスが荷台の側によって、遺体にかぶせられていたクロークを持ち上げた。アカバスはため息をつき、肩を落とした。
「先生……」
ウェルテが背後から声にならない声を発すると、アカバスは振り向きゆっくりうなずいた。ウェルテが馬車の荷台を覗き込むと、そこでは真っ白な顔をしたサリエリが眠るように横たわっていた。

その夜、ウェルテは、アカバス博士やサリエリと特に親しかった役場の同僚数人と共に、サリエリの自宅へ弔問へと赴いた。すでに雇われた触れ役達が街中を走り回りながら、サリエリの死と葬儀の時間、場所を告知していた。
アグレッサ城に近い、街の東側にサリエリの実家はあった。サリエリの一家は、五階建ての集合家屋の、二階と三階で暮らしていた。すでに玄関には黒い垂れ幕が掛けられ、その家に不幸があっとことを知らせている。アカバスを先頭にウェルテ達は垂れ幕をくぐって家へと入っていった。二階広間の中央には楡の木で作った棺が置かれ、祭服を着た教会の僧侶が二人、死者の旅立ちの準備を進めていた。
アカバスは、部屋の隅に控えているサリエリの両親や兄弟達に挨

拶の言葉を述べ、父親の手を両手で握り締めた。ウェルテは棺の横に立ち、サリエリの顔を見つめた。今朝会った時より青ざめているが、普段と変わらぬ丸顔の優しそうな顔で眠っていた。ウェルテは今朝の、サリエリの親切心を思い出し、顔を歪めた。

「ぶどう酒は欲しくないのか？　サリエリ……」

そう言ってウェルテは手袋を取った手でサリエリの額をなでた。手にひんやりと冷たい感触が伝わってくる。ウェルテに同僚の死を実感させるのは、その亡骸の冷たさだけだった。

「なんでお前がこんな目に……」

――僕の為に、こんな事になって……　すまないな……

はるばるプラムベリーからやってきた異邦人であるウェルテに、同僚としていろいろ手伝ってくれたのがサリエリだった。未だサリエリの死に現実感が沸いてこず、ウェルテは涙を流すような心境にはならなかった。同僚からだけでなく、農民や商店主からも慕われていたサリエリに敵がいたとはとうてい考えられない。

棺の方へアカバスがやってきてウェルテに、遺族への挨拶をするよう促した。ウェルテは棺を離れ、サリエリの両親のもとへ行き言葉をかけた。

「こんなことになって、言葉もありません……　それも今日に限って……」

ウェルテはそう言ってサリエリが自分の仕事も引き受けてくれたいきさつを、サリエリの家族達へ話して聞かせた。

「誰がこんな恐ろしい真似をしたのか全く判りません。なんで、サリエリに限って……」

すると彼の父親がうなずきながら棺の方を見た。

「お金を扱う仕事だから、多少の危険は仕方ないと倅はいつも言っていました。ただ実際にこの場になってみると……　なんとも、やりきれない……」

すると隣で俯いていた母親も目の涙を拭いながら言った。

「これも神様の思し召しだと思って、今はただ、あの子の魂の平安

を願う……ばかり……」
そこまで言いかけて、とうとう母親はその場で泣き崩れてしまった。ウェルテはあわてて崩れ落ちる母親を、父親と一緒に腕をとって支え、近親者達が彼女を介抱するために部屋の外へと連れて行った。
挨拶を終え、ウェルテ達はサリエリの実家を後にした。帰り道、火の灯ったオイル・カンテラをぶら下げて真っ暗な街路を先導していたウェルテに、後ろからアカバスが声をかけた。
「スタックハースト、お前、確か今日はどこまわる予定だった？」
「霞の森にあるエルベ荘園の粉引き場とバルテルミ村の村長の家です」
本来、ウェルテが今日取立てに廻るべき場所で、サリエリに代理を頼んだ場所だった。
「そうか……」
アカバスはそう一言だけ返事をして黙ってしまった。
「あの、先生。サリエリはどこをまわる日だったんですか？　それに、青騎士達はサリエリを見つけた様子について、なんと説明してくれたんですか？」
「方向はお前と同じく霞の森の方だ。騎士どもが言うには、バルテルミ村へ行く道ではなく、アイアン街道に近い、森の手前の路地に入ったところで胸を一突きされて倒れていたそうだ」
アイアン街道とは、西のデルブレー山脈の麓にあるノックス砦へと続く、霞の森を横切る通商路で、山脈の向うにある工業都市から主に金属製品を運んでくる道である。
「遺体を見た床屋や坊主に尋ねたら、やや幅広の刃物で一突きにされていたという。着衣に乱れはなかったが、集金したはずの金は持っていなかった。皮袋ごと持ち去られたようだ」
「ロバはどうなりました？　サリエリはロバに乗って行ったはずです」
アカバスはうなずいた。
「忠実なそのロバは、主人のそばで草を食んでいた。騎士どもがも

う両親に引き渡している」
ウェルテは、他にサリエリの持ち物で盗られた物がないか尋ねると、アカバスは首を振る。
「着衣に乱れは少なく、筆記具や剣もそのままだったそうだ。剣で賊と斬り結んだ形跡もない」
ウェルテは怪訝な顔でアカバスの顔を覗き込む。
「盗賊なら身ぐるみ剥がしてゆくはずです。金だけ盗って、剣も服もロバにも手をつけないなんて、そんな盗賊いるでしょうか？」
アカバスはウェルテに顔を向けずに言った。
「青騎士の蹄の音でも耳にして、急いで立ち去ったのだろう……とにかく、我々の仕事には危険が多い。集金後は特にだ。スタックハーストも十分に注意しろ。しばらく霞の森には行かなくていい」
アカバスはそう言って、広場で徴税役場の一団を解散した。アカバスや同僚達は各々自分のカンテラに灯を入れ、真っ暗な街路へと散っていった。

翌朝、アグレッサの天井は灰色の雲におおわれていた。時々、小雨が落ちるなか、街の北側、市門を出た野原にある墓地でサリエリの葬儀は行われた。楡の木でできた棺の前には赤いローブ状の祭服を着た教会の僧侶が教典を手に祈りの言葉を吟じる。
「彼は、職務に忠実でした。そして、職務を通じて触れ合う全ての人々に対して、誠実に、そして愛をもって接しました。何故彼のような者がこんなにも早く、天に召されるのか？　残された者達の……」
多くの会葬者が僧侶と棺を取り囲むようにして、黒い喪服もしくは喪章を身につけて立っていた。市民や徴税役場の関係者、そしてはるばる市外の荘園や農村からやってきた農民の姿も見える。会葬者の片隅で、ウェルテはサリエリに最後の別れを告げるために帽子をとって僧侶の声に耳を傾けた。

――一体、お前に何があったんだ……

「それには、我々には到底推し量る事が出来ない、天の御意志があるのです。彼の魂は我々より一足早く、救済への階段をのぼりはじめました。彼の旅が平安である事を祈りましょう」

祈りが終わる、棺がゆっくりと墓穴の中へと下ろされていった。彼の親族がそこへ土をかけてゆく。

――さよなら、サリエリ。もう、僕には何もしてやれないが、もし仇とめぐり合う幸運に恵まれる事があったら、その時は必ず剣を抜くよ……

ウェルテは棺に誓って腰のレイピアの柄を掴んだ。

ウィングレットの田舎貴族

友人の旅立ちを見送り、ウェルテは朝食をとるためにロクサーヌの酒宿を訪れた。
「おはよう、風邪はもういいのかい？」
ロクサーヌがカウンターの向うから尋ねた。
「おかげさまで……　朝ごはんお願い」
ウェルテはクロークと帽子をとって近くのテーブル席へと腰をおろした。
　カウンターにはエールの入ったコップを傾けているガスコンがいた。今日は仕事がないようで、いつも身に着けているチョッキのような袖なしの革の鎧ではなく、シャツの上にチュニックだけの軽装だった。
「やっぱりお前も葬式だったのか」
ウェルテの左腕に巻いてある喪章を見て、ガスコンが言った。ウェルテはうなずき、腕に巻いていた黒いリボンを解く。
「話は触れ役から聞いた。親しかったのか？」
ウェルテはうなずいた。
「この街へ来た時、とても世話になった……」
　ロクサーヌが食事を持ってやってきた。硬いバタールと干し肉のシチューだった。バタールを細かく千切り、あめ色のスープに浸して口へと運ぶ。ウェルテは無言で食事を済ませお茶を飲み干し、ロクサーヌへ食器を返した。
「なぁガスコン、昨日、盗賊に襲われたと言っていたよな？」
「ああ、霞の森の抜け道でな」
ウェルテは唇を噛んだ。
「普通、盗賊って身包み剥いで持ってくと聞いているけど、実際はどんな連中なんだ？」
「俺も数回しかやり合ってないから判かんねーよ。ただ普通は、足

が付きそうな品以外は根こそぎだろう。……その気の毒な仲間っていうのは、盗賊にやられたのか？」
「昨日、霞の森で。役場の上司はそう言ってた。それに青騎士隊もそう考えているって……　ただ、盗まれたのは金だけで、乗ってたロバも、剣も服も手付かずだった」
それを聞いたガスコンはしかめ面になった。
「そりゃ、よっぽど金に余裕のある盗賊だな」
カウンターにいたロクサーヌは思わず笑う。
「あんた、金があるのに盗賊なんてやる馬鹿な人いるの？」
ガスコンは舌打ちした。
「だろ？　つまりそんな仕事する奴は盗賊じゃねーんだよ」
黙って聞いていたウェルテはうんうんとうなずいた。
「そっか……　判った。とりあえず僕は霞の森まで行って来る。そいつが昨日回ったところへ行ってみようと思うんだ」
ウェルテはクロークを羽織りながら言った。
「おい、一人でか？　危ないぞ。このエールを飲んじまったら俺もついてくぜ」
「お守り役なんかいらないよ。それに、久々なんだろ？　ロクサーヌと一緒に居てやれよ」
「ちょっと、何言うのさ。冗談もいい加減にしてよ」
ロクサーヌが赤くなって叫ぶ。
　ウェルテはそんな声を背にドアに手をかけようとすると、外からドアが押し開けられ、異様なシルエットの人影が酒宿の入口に姿を見せた。今朝からずっと沈鬱な表情だったウェルテの顔が、思わず怪訝の色を湛えて歪む。ガスコンとロクサーヌもその来訪者の姿を認め、眉間に皺を寄せた。
「おや、誰かと思えば、我が友たちではあるまいか」
来訪者は、鼻にかかった声とゆっくりした語調でウェルテ達に挨拶した。
　開け放たれた木のドアの外に立っているその男は、雨水と光沢で

反射する絹でできた群青色のクロークをはためかせて、酒宿へ入ってきた。キュロットを履いた長い脚はピカピカに磨かれた漆黒の乗馬ブーツに納められている。男は酒宿の中を優雅な仕草で見回した。輝くばかりのブロンドの長髪は帽子の隙間から肩にかかり、白く端整なつくりの顔には品良く整えられたカイゼル髭を生やしている。だが、室内の三人が呆気にとられているのは、その奇抜な服装以上に奇怪な、この客人の頭のせいだった。フェルトでできた紫のツバ広帽子の上には、これでもかというくらい銀色の羽毛で飾り付けられ、反り返ったツバの周囲には白いレース生地が縫いこまれている。そして、頭頂部にはオレンジやリンゴ、ブドウを盛ったフルーツバスケットがのっかっていた。

「お、お前、そのなりはなんだ？」

我に返ったガスコンが唾を飛ばしながら叫ぶ。奇妙な客人は澄んだ青い双眸で退屈そうな眼差しを送りながら、高価なクロークから雨垂れを払った。

「相変わらず礼儀を知らぬな、パンタグリュエル。スタックハーストも久しぶりではないか」

そう言ってクロークを脱いだ客人は両手で帽子をとり、近くのテーブルに置いた。ゴトンと音がしたところを見るに、相当重い帽子のようだ。エリマキトカゲのようなひだ襟を着け、金糸を縫いこんだ白いフリルだらけのジャケットを着た客人はテーブル席についた。

「お久しぶりね、ナイジェル卿。とりあえず、ようこそいらっしゃいました〜」

ロクサーヌは芝居がかった仕草でスカートの両すそをつまんで会釈した。

「うんうん、ロクサーヌ。そなたはいつ見ても美しい。前にも言ったが、そなたさえ了解してくれたら、私はいつでもそなたを第二夫人候補か第三夫人候補に迎えるところなのだが……」

「あーら、光栄ですこと。でもあいにく、あたしには心に決めた人がいるので、他を当たってくださいませ」

ロクサーヌはそう言ってこれ見よがしにガスコンの肩に抱きついて見せた。この二人は会う度にいつも同じ言葉の応酬を繰り返してきたので、ガスコンは完全に無視を決め込んでいる。
「そうか、実に残念だ……」
ナイジェルと呼ばれた男は舞台俳優のように掌を額に当てて嘆いてみせた。
　この奇妙な風体の男、ナイジェル・サーペンタインはプラムベリーの街に程近いウィングレットの荘園領主の息子で、かつてプラムベリー城内でウェルテやガスコンと共に剣豪ヴァンペルトから剣術の手ほどきを受けた仲間であった。ちなみに、この男の第一夫人候補は彼の父親であるウィングレット伯が決める事になっているが、それは未だ空席のままである。その為、彼が外で心惹かれる女性は、全て第二夫人か第三夫人候補となるのだが、その座が埋まったという話はまだない。
「ところでウェルテ・スタックハースト、さっきから黙って私を見ているが、そんなに私の姿に魅了されたのか？」
呆れて言葉も出ないウェルテにナイジェルが尋ねると、すかさずガスコンが怒鳴る。
「んな訳ねーだろ！　その馬鹿げた格好に度肝抜かれてるんだよ！
　それに、その果物屋の看板みたいな帽子は何のつもりだ！」
非常識なその姿は街中でも目立つ事間違い無しだ。
「無礼者！　これだから風流を解さぬ田舎者は困る。この帽子も上着も、エスカルの街で今もっとも流行りの仕立て屋に作らせた物なのだぞ」
　エスカルの街はアグレッサの南、宗教都市グライトに近い被服産業の盛んな街で、流行の発信地としても名高い。ただ、その街の権威ある仕立て屋達の傑作が一般市民層によく理解されているかというと、それは非常に怪しい。
　ウェルテは古いなじみ乱入に苦笑いを浮かべた。この朝初めて浮かべた笑みだった。

「変わんないなナイジェル……　来たばっかで悪いけど、仕事だからこれで。時間があったらまた」
「おい、待てよウェルテ」
ガスコンの呼びかけにも応じず、ウェルテは帽子をかぶると酒宿を後にした。
「あーあ、行っちまった……　それはそうと、お前一体何しに来たんだ？」
「エスカルやグライトで開かれていた大市を巡っていたのだ。たまたまアグレッサにも用ができたので寄ったまでのこと。だが、ウェルテもお前もどうもせわしない。これだから平民は余裕が無くてつまらん」
ナイジェルはそう言って椅子に腰掛けた。
「ところで、今、城門の前で赤い上着を着た騎士達を見たが、どうやら私と同じようにグライトから教会の幹部が訪れているようだ」
　グライトに駐屯するフォルス教会の教会騎士団達は、いつも磨きぬかれたプレートメイルの上から赤いサーコートとマントを羽織って、教会の上級聖職者達の護衛についている。赤い衣をまとった騎士達がいるという事は、そこに教会の実力者がいる事を意味していた。
「だから、いつも教会がらみの愚痴には気を付けろって言ってんだ！」
ガスコンは昨日ロクサーヌの愚痴を思い出し、思わず彼女を怒鳴りつけた。
「しょうがないだろう？　文句の一つも言いたいくらいこっちもカツカツなんだよ」
ロクサーヌは口を尖らせる。
「確かに聖職者には、盗賊やごうつく領主以上に注意しなければならんな。彼等こそ、神を使ったギルド顔負けの商人集団だ」
ナイジェルはそう言って上着の内ポケットから細長い煙管を取り出し、ロクサーヌに炭火を分けてくれるよう頼んだ。〈新世界〉と呼

ばれる海を越えた大陸で栽培される特別な薬草を乾燥させ、みじん切りにして管に詰め、そこに火を付ける。すると、やたらと臭う煙が管から周囲に撒き散らされる。それを一生懸命に吸い込み、一時的に軽い陶酔状態を味わう娯楽が生まれていた。まだまだこの大陸では一般的ではかったが、この遊びは一部の貴族や商人達の間で少しずつ流行り始めていた。

「まーた、お香を吸ってる。新世界って妙な物が多いのねぇ。一度どんなところか行ってみたいわ」

ロクサーヌは興味深そうにナイジェルの火遊びを眺めていた。一方、ガスコンは鼻をつまんで激しく咳き込む。ガスコンとウェルテは以前から、ナイジェルの撒き散らすこの「お香」の刺激臭が大嫌いだった。

「いい加減にしろ。表でやれ！　喉が……ゲホゲホッ、満足にエールも飲めねぇ！」

ナイジェルは煙を一吹きすると、ため息をついた。

「嘆かわしい……　パンタグリュエル、お前は本当に風流の判らぬ男だ……　それに、こんな時間に酒を飲んでいるところを見るに、職にあぶれているな？」

ナイジェルはそう言ってガスコンに煙を吹きかけた。

「よせって！　ゴホッゴホッ……　戦が無いんだからしょうがねぇだろ！」

「傭兵なんて損な仕事を選ぶからだ。だが、心配せずとも戦ならもう間もなく始まりそうだ。グライトでは教会が異端討伐軍を組織する為、兵隊を集めていた。それを聞きつけて、あちらこちらから荒くれどもが集まって来ていたぞ。お前も行ってみてはどうだ？」

ガスコンは禁句を聞いたような表情で手を振った。

「そいつはご免だな。教会の絡む戦は、相手がはなから人間扱いされてねぇから戦い方も滅茶苦茶なんだよ。戦の誉れなんかありゃしねぇ。でも、百歩譲って戦闘自体はお互い様だからまだいい。それ以上に、終わった後の殺戮、暴行、略奪の乱痴気騒ぎには歯止めが

利かねぇ。日頃取り澄ましている貴族や騎士、果てには教会の坊主までもがモンスターみたいになっちまう」
それを聞いてナイジェルは笑った。
「そもそも、殺し合いには誉れどころか、道理も無法もあるまい。『道理に沿った殺し』など、それこそ異端討伐軍付き祭司の言いそうなこと」
若い貴族は暖炉の前で、煙管から灰を落とすと、それを元あったポケットへとしまう。
「さて、そろそろ失礼しよう。今日はまたも辛い失恋もしてしまったことだし、このわびしさは、アグレッサの町娘達に癒してもらうとしよう」
そう言ってナイジェルは気前良く1ゴルド金貨をテーブルに置いて立ち上がった。
「二、三日はアグレッサにいるつもりだ。時が許せばまた会おう」
ナイジェルはクロークを着て、派手な帽子を頭にのせた。
「あーら、今日はお早いのね？　ところで、お泊りはどちら？　なんなら上の部屋空けときますよ」
ロクサーヌが、テーブルの上の金貨に目を奪われながら尋ねた。
「申し出には感謝しよう、愛しのロクサーヌ。たしかにアグレッサでここほど清潔な宿はないからな。だが、今回はアドリアーノ・オストリッチの家に滞在する事になっている。なんでもあの商人、近々面白い物が手に入るから見に来て欲しいとエスカルまで手紙を寄越してきたのだ」
オストリッチという名を聞いてガスコンは顔を引きつらせた。
「さらば、友らよ……」
ドアが閉まると、ロクサーヌは金貨を握り締めて軽やかに体を一回転させた。
「やったー、ねぇガスコン、肉屋で牛肉でも買って、今夜あたりシチューにしない？」
そんなロクサーヌの声も遠く、ナイジェルが去った後、ガスコンは

炭酸の抜けきったエールのコップを置き、難しい顔をして腕を組んだ。
「アドリアーノ・オストリッチ……」
よりにもよって自分が汚れ仕事を請け負ったばかりのオストリッチ商会、その当主に会いに来たという古いなじみ……　ガスコンは口をあけたまま歯軋りした。昔から治らない、無意識に出る悪い癖だった。十代の頃から戦場で培ってきた、自分の動物的勘が厄介事の前触れを伝えている証だった。

エルベ荘園

ウェルテはアグレッサの西門をくぐり、石敷のアイアン街道を西へと急いでいた。アグレッサの街は平野部の真ん中にあり、町の周囲は草原となっている。遠くには羊の群れを追い立てる牧童や、収穫直前の麦畑を見て廻る農夫の姿が見えた。アイアン街道はその平原の真ん中をまっすぐ西へ向かって伸びていた。

サリエリは昨日、ほとんど同じ時間にここを通って森へと向かったはずだった。歩みを進めながら、ウェルテはサリエリと初めて会った時の事を思い出した。

読み書きとソロバンができたウェルテがアグレッサの徴税役場で見習い兼下働きの仕事を得たのは二年前の事だ。

「よう！　プラムベリーから来たんだって？　あそこはアグレッサより暖かくていい所なんだってな？」

そう人好きのする笑顔で気さくに話し掛けてきたのがサリエリだった。もう住む場所は決まっているのか？と問うサリエリにウェルテは町の北側にある下宿屋にしようかと思っていると応えた。

「やめとけ、やめとけ。盛り場に近すぎる。酒を飲みに行くには近くていいけど、あの辺は夜中も騒がしいし。ならず者も多い。それに、あの界隈はネズミやシラミが多い地区だ。下手な部屋に入ったら大変だぞ」

それを聞いたウェルテはさぞ青い顔をしていたのだろう。サリエリは大きく笑いながら言った。

「心配すんなって。もっといい、きれいな部屋を紹介してやるよ」

そしてサリエリは、街の西側にある住宅街にある、こじんまりとはしているが瀟洒な下宿を紹介してくれた。実際そこは、清潔で日当たりも悪くない、手ごろな宿賃で生活できる部屋だった。以来、ウェルテはそこにから役場へと通っている。

その後もサリエリは、ウェルテになにかと世話を焼き、ウェルテ

はアグレッサでの生活にすぐに慣れることができた。仕事の外回り先で一緒にサボって昼寝をしたり、時には酒を飲み、酔っ払って下手くそな詩を吟じて酒場の笑いものになったり、調子にのってハマった賭けすごろくで危うく破産寸前になったりと、くだらないが非常に楽しかった思い出がウェルテの脳裏に蘇ってくる。

ウェルテから見て、そんなサリエリに恨みを抱く人物がいたようには思えなかった。顔に似合わず農村の娘に良くもてていたのは、ウェルテも知っていたが、そのせいで恨みを抱かれたりトラブルになったという話も聞いたことが無い。むしろ、その手の愚にもつかないトラブルはナイジェルが一、二度もちこんできたことがあったが……

一方で、もし怨恨ではなく、通りすがりの場当たり盗賊にやられたのだとすれば、それはそれでやりきれない事だ。確かに盗賊はアグレッサに限らずどこにでもはびこっている。事実、ガスコンも同じ日に霞の森で襲撃を受けたくらいだ。森の中には複数の盗賊団が潜んでいるとも言われていた。サリエリは不運にも、その凶悪な盗賊に出くわしてしまったのだろうか。そこまで想像し、ウェルテは急に怒りが吹き上がってくるのを感じていた。

ウェルテは、昨日からサリエリの足跡を辿る事にしようと決めていた。そうすれば、今はまだ全く判らない事件の一端が自分にも理解できるかもしれないと思ったからだ。その為に、今日は日の昇る前に起き出し、レイピアとマンゴーシュの刃を入念に研ぎ、油を引いておいた。ウェルテは決して粗暴でも、好戦的な性格でもなかったが、その腕に覚えが無いわけではないし、以前に友人の持ち込んだトラブルに巻き込まれ、止む無く剣で物事を解決した事もある。もし途中で盗賊が向かってこようものなら、今回ばかりはサリエリの仇とばかりに容赦無く斬り倒すつもりだった。

ウェルテは馬の鳴らす蹄の音で我に返った。さっきから何度も、荷台を膨らませた多くの荷馬車が、ウェルテを追い越したり、すれ違ったりした。この街道はアグレッサを支える大動脈の一つであり、

使われている馬車や馬などの運搬手段は全てアグレッサ荷車ギルドに加盟しているか、もしくはギルドと提携した領外の商人のものだった。

街を出て一時間半ばかり歩くと、街道は鬱蒼とした森の入口に差し掛かる。アグレッサ領の西に広がる霞の森の入口だった。街道は森を切り払ってまっすぐ西のノックス砦へと繋がっている。今日の空は曇り。霞の森には薄いもやが掛かっていた。舗装された街道をしばらく進むと、木々を伐採してつくった、馬車が二台並んで通れるくらいの幅の砂利道が右手にあらわれる。

ウェルテは街道を離れ、森の奥へと繋がるその枝道へと進んでいった。街道から逸れた途端、人の往来はほとんど無くなった。この先、道は何度か枝分かれして、領主直轄農地であるエルベ荘園へとつながっている。帽子やクロークがもやに晒されて湿ってゆく。じめじめとして涼しい森だ。耳に届くのは小鳥の声と砂利を踏みしめる足音だけだ。ウェルテが足を進めると、道の右側に丸太でつくられた人の背丈ほどの塀があらわれた。塀はまるで砦の柵のように森の奥からこの枝道の横を走り、また森の奥のほうへと続いている。塀の奥は領主専用の狩猟用鳥獣保護区になっており、許可の無い者の立ち入りは硬く禁じられていた。その塀は、保護区内の鹿や猪、狐など、狩りの獲物が外へ逃げてしまうこと防ぐ為のもので、森の恵の枯渇を防ぎその独占を保証するためのものだった。

塀が見えなくなり、さらに歩きつづけると森が広く切り開かれた耕作地に出る。簡単な木の柵を越え、ウェルテはエルベ荘園へとやってきた。開けた視界には耕作地が広がり、そのまん中にこじんまりとした集落がある。ウェルテは畑のあぜ道をつたって集落へと向かった。そこでは農夫達が、藁をふいた家のひさしの下にしゃがみ、硬そうなパンをかじっている。ちょうど昼食の時間だったようだ。

「こんにちはー」

ウェルテが挨拶すると、農夫達は顔を上げた。

「毎度どーも、お役人様」

「あんれ、今日もおいでですか？　たすか昨日も、よく肥えた方がロバに乗って、来なすったけども？」
――やはりサリエリはここへは来ていたんだ。
「今日はちょっと別件で。そういえば、そいつ昨日はいつ頃ここ通ったか判りますか？」
「丁度、昼飯の一時半ほど前だったかね？」
ウェルテは愛想良く笑ってうなずいた。
「そっか、ありがとう。お邪魔しました」
ウェルテは足早に集落を通り抜けると、ウェルテは先程よりも厳しい表情になった。今、アグレッサは収穫期を迎え、最も食料が豊富な時期だった。この時期は貧しい小作農ですら、それなりの贅沢が許される季節だった。だが、今見た農民達は二人一組で一つのパンを分けて食べていた。それ以上にウェルテが驚いたのは、昼食がその半切れのパンだけだったことだ。数週間前に来た時は、彼らも野菜や煮込み料理などのおかずも食べていた。今年の穀物の収穫数は危機的に少ないのではと感じ、ウェルテは強い不安を感じ始めた。食糧不足は農村だけでなくその地域一帯の安全を脅かすからだ。
そのまま、ウェルテは村はずれにある粉挽き小屋へと向かった。粉挽き小屋は荘園に流れる小川の辺に建てられていて、小屋の横には動力の源である水車が回っていた。そして、小川の向うには三階建ての頑丈な石造りの館が建っている。それは、マナーハウスと呼ばれる領主の別宅と代官所を兼ねた建物で、荘園の農民達を監督する役人達が詰めている。
もっとも、ウェルテがいつも仕事で訪れるのはマナーハウスではなく、その手前の粉挽き小屋の方だった。この村は領主の荘園にあるので、そこの地代はすべて荘園付きの代官に直接納められる。だが、直接農業に従事していない粉挽き業者だけはウェルテのような徴税吏を通して領主に税を納めていた。
ウェルテの背丈の二倍半はあるかという大きな下射式水車が水音を立てながらゆっくりと回っている。木造の粉挽き小屋の開け放た

れたドアから中を覗くと、粉屋のヒッグスが昼飯を貪っていた。小屋の作業場では木でできた歯車が組み合わされ、大きな石臼が回っている。
「また来たのか！　支払いは昨日済んだはずだぞ」
ウェルテを見るなり、太っちょのヒッグスは小屋の騒音に負けないように怒鳴る。
「ということは、昨日、僕の代理が来たんだな？」
「何訳の判らないこと言ってやがる。おたくが風邪引いたからつって、ロバに乗ったでかい奴を寄越しただろう？　こっちは二十シルバも分捕られて涙もでねぇよ！」
ウェルテはうなずいた。サリエリはここでウェルテの替わりに、きちんとヒッグスから税を徴収していったのだ。
「ならいい、別に徴収に来たわけじゃない」
そう言うと、粉屋は少し落ち着いた様子で昼食を再開した。粗末な小さいテーブルの上には硬いパンと肉団子の入ったスープにオレンジ、それにエールまである。
　どこの村でも粉屋は儲かる商売だった。というのも、農民が領主へ地代を納める場合、主要作物である麦を粉にした上で換金してから納めなければならなかった。だから、農民は水車小屋と大きな臼を持つ粉挽き屋に依頼して粉にした上で現金に換えてもらっていた。その際、必ず粉屋から加工賃と手数料をとられるのはいうまでもない。だったら、農民は自分で麦を粉にすればいいでのはということになるが、この大陸の東側では、各地の領主が石臼と粉挽きの権益を完全に押さえていた。一般市民や農民による石臼の所有は厳しく制限され、粉挽き業は完全な免許制がとられていた。
　ことアグレッサでは、もぐりの粉挽き行為は重罪であり、見つかった者は青騎士隊によって容赦無く両手首を切り落とされた。もし粉屋を始めようと思う者は最初に、領主へ莫大な免許料を支払って石臼や水車小屋を設置する権限をもらい、毎月特別税を払いつづける必要があった。だがそれらの負担を差し引いても、粉屋は実入り

多い商売だった。
「で、何しに来たんだよ？」
　ヒッグスはスープをズルズルとすすりながら訝しげな目でウェルテを見た。ウェルテは腕を組んで壁に寄りかかり、回っている石臼を見ながら言った。
「ここへ来た僕の代理……　昨日、森で殺された。犯人を探してる」
ヒッグスがむせて顔を上げた。
「おい、冗談だろ？」
ウェルテの真面目な顔を見てヒッグスは表情を硬くした。
「どこでやられたんだ？」
「街道沿いのわき道で森の入口に近いところとだけ聞いている。彼が来て、何か変わったことは無かった？」
ヒッグスは首を振った。
「知らん、知らん。俺は言われるまま今月の水車税と臼税を払って……　いいか俺は確かにちゃんと二十シルバ払ったんだぞ？」
「それはわかったから、それで彼はどうしたんだ？」
「ロバに乗って来た道の方へ帰ったよ。なんか、まだ回るところがあるとか言ってたな」
ウェルテはため息をついてうなずいた。
　小川の向うに見えるマナーハウスの入口では、数人の男達が長剣を研いでいる姿が小さく見えた。
「ずいぶんと賑やかだな、領主はまた狩猟会でも開くのか？」
平時に大きな剣を差しているのは騎士や兵士を除けば、猟師くらいのものだ。
「かもな……　俺達には関係ねぇよ。ただ、なんか狩人みたいなやつらが大勢来ていて、ちょっと騒がしいんだ。あ、そういや……」
ヒッグスは食卓から顔を上げてマナーハウスの方を見た。
「昨日は丁度、ギルドの荷馬車が何台か来ていて、食い物をやたらあの館へ運び込んでいた。おたくのその気の毒な奴が、宴でも開かれるのかって聞くから、わからねぇって答えたけど、なんか興味深

々って感じで見てたぜ」
ヒッグスの話を聞きながら、ウェルテはマナーハウスを見つめていた。三角帽を被った代官所の役人らしき男達が、ウェルテのいる水車小屋を警戒するように見つめていた。
「そうか、ありがとう。食事中にお邪魔様」
ウェルテはそう言って水車小屋を後に、元来た道を引き返しはじめた。敢えてマナーハウスの方を見ないように歩いてきたが、村はずれで一度振り返ってみると、三角帽の男達は依然、ウェルテをじっと見張っていた。

次の『仕事』

昼下がりのアグレッサ。防水の為に外側に蝋を塗った茶色のクロークに、羽飾りなどとうになくなってしまった、変色した革のツバ広スローチハットといういでたちで、ガスコンは教会前広場の市へ向かっていた。

ナイジェルの来訪によって思わぬ臨時収入を得たロクサーヌが、肉をたくさん買い込んで皆でお腹一杯食べようと提案したのだが、今朝葬儀に出席したばかりで気の沈んでいるウェルテの事を考え、それは延期することになった。代わりに今夜は二人で、いつもより上等な酒を楽しもうという事になり、ガスコンがその買い物のお遣いに出される事となった。

酒宿には当然、エールもぶどう酒も用意してあるのだが、どんなにしっかり密封しても、醸造から時間の経った酒は泥水みたいになり、風味も酷いものだった。アグレッサで作られた物ならば新鮮な酒もそれなりに安く手に入るのだが、気候や土地のせいか、アグレッサで作られた酒や食べ物は概ねに不味いことで知られている。ぶどう酒の名産地である北方の街カベルネや、良質の大麦がとれるグレープスの穀倉地帯からは、状態のいい新鮮なぶどう酒やエールが快速荷馬車で届けられていたが、当然それらの上質な酒は高価だった。

教会の大きな鐘楼が見下ろす広場には多くの露店が開設され、様々な品物を並べた店の間を、多くの商人達や買い物客が行き来していた。毛織物や高価な綿織物に群がる商人や仲買人の人山を避け、ガスコンは広場の端を迂回するようにして、目当ての店へとやってきた。広場に面する店舗前には荷馬車が止まり、馬車から降ろされた大樽がいくつも並んでいる。

ガスコンはロクサーヌから渡された小ぶりの樽を店番の男へ渡す。

「カベルネのぶどう酒とグレープスのエール。上等な新しいやつを

頼む」
「わかりやした、今届いたばかりの酒ですよ」
男は手早く樽の天板に穴を空けると、計量容器に深い赤紫色のぶどう酒を注ぐ。色は透き通り、ルビーのようだ。ガスコンの鼻腔に濃厚な土と果実の匂いが届いた。いつも目にする、黒く濁ったカビ臭いぶどう酒とは大違いだ。もっぱらぶどう酒よりもエールを好んで飲んでいるガスコンだが、そのぶどう酒を前に思わずツバを飲み込んだ。同じ要領で店番はもう一つの小樽にエールを注ぐ。黄金色のエールが炭酸によってジュワっと泡を作る。ガスコンは今日の夕食が待ち遠しくなってきた。
「えーと、あわせて二十三シルバになりやす」
「あ？　ああ、わかった」
あまりの高さに一瞬驚いたが、ガスコンは慌ててロクサーヌから渡された革袋から銀貨を取り出し、店番に渡す。店番は金を受け取ると小樽に栓をした。
「重いからお気をつけて、毎度どーも」
　ガスコンは注意深く小樽を抱えて酒宿へと帰路についた。もし、うっかりして酒をこぼそうものなら、ロクサーヌからどんな目に遭わされるか判ったものではない。そう気を付けているそばから、ガスコンは居酒屋からふらっと出てきた男とぶつかりそうになった。
「おっととと……　これは、失礼を……　おや？　これは、あの時のお兄さん」
男は千鳥足でふらつきながら、ガスコンを見て笑った。荷馬車の護衛をやった時に同じ馬車にいた、ブロードソードを腰に下げた酔っ払い男だった。もうかなりできあがっているらしく、かなり酒臭い。
「あん時のおっさんじゃねーか。昼間から酒か。羨ましいぜ」
呆れた様子でガスコンが言うと、男は笑って首を振る。
「もう金が無い。駄目駄目だな、アハハ……　……おや？この匂いは」
男は急に鼻をクンクンと鳴らし始めた。

「ん……　これは、上物の匂いだ……　お兄さん、いい酒持ってるね……」
ガスコンは思わずしかめ面になり、まるで外敵から赤ん坊を庇う母親のように酒樽を抱きしめた。男はきししと笑って手を振った。
「し、心配……　いらない。小生は、この安エールで、十分……素晴らしきや、無炭酸のエール」
男はしゃっくりで途切れ途切れになりながら笑い、空っぽの杯を掲げた。ガスコンはため息をついた。
「おっさんも飲みすぎて、怪我しねぇようにな。じゃあ俺はこれで」
「ああ、お兄さんも達者で……　ああ、そういやお兄さん、新しい仕事の話は……　知ってるかね？」
ガスコンは振り返り、怪訝な顔で首を振った。
「さっき……　北にある酒場で、この前の仕事を寄越した男に……声を掛けられた。新しい仕事……だそうだ。引き受けて成功したら、二ゴルドと……　三十シルバ払うとかなんとか」
「二ゴルドだぁ……　そりゃ、何の仕事だよ」
ガスコンは驚いた。余りにも高すぎる報酬だ。密輸の護衛以上にヤバイ仕事だという事は明らかだ。男はよろけて、ガスコンにぶつかりそうになりながら、耳元ではっきりした声でつぶやいた。
「殺しの依頼だ」
――やっぱり、思った通りだぜ
ガスコンは舌打ちした。
「で、おっさんは引き受けたのかよ？」
男は笑って首と杯を振った。
「いやいや、まさか、まさか……　小生はやらない。そいう危ない仕事は……やらない。ただ、お兄さんは腕が立つ。目当ての首はそれなりの剣豪だそうだ。興味がある……なら、この前、品物を運び込んだ……あの倉庫へ行ってみたらいい」
男はそう言って手を振ると、千鳥足で市の雑踏の中へと潜っていった。

ガスコンは男の背中を見送りながら、ため息をついた。ガスコンには、自分でも身分不相応だと思ってしまうくらいの矜持を持っていた。戦いの場以外で無駄な殺生はしない。たとえ、戦いに参加するにしても、自分がその都度納得できる雇い主の下でしか戦わない。

確かに二ゴルドの報酬は魅力的だったが、欲張りな商人に金で釣られて殺し屋になるつもりは元より無かった。だが、荷車ギルドが臆面もなく殺しの依頼までしてきた事には、ガスコンも驚いた。

ガスコンは樽を抱えて一路、大通りを南へと歩き出した。昨日、襲撃者から守りきった密輸品を運び入れた蔵は南門近くの街外れにある。

――ギルドのやつら、何企んでやがる……

それに、昨日自分達が守った品物がどうなったかも気になった。

街道をしばらく歩くと、低層の粗末な住宅が集まる街外れへとたどり着く。ガスコンは舗装された街道から脇道へ曲がり、昨日の朝、荷馬車に乗って訪れた倉庫の集まる一角へ足を踏み入れた。このあたりは人の往来もまばらだ。ガスコンは人に出くわさないように忍び足で、辻の横に設けられた水汲み場の陰に身を隠し、ギルドの隠し蔵のほうを覗く。

平たい三角屋根の木造倉庫、その正面の木戸は開け放たれて、中まで良く見えた。入口付近では五、六人の男達がたむろしていた。どれも、街の北側でよく見かけそうなヤクザ者みたいな男達ばかりだ。そのなかで、一人だけ見知った男がいた。この前、自分に荷馬車護衛の仕事をもちかけてきた荷車ギルドの仲介人だ。

――おっさんの言う通りだな……

ガスコンは薄暗い倉庫内へと目を凝らす。床一面イグサが敷かれているだけで倉庫は空だった。自分が運び込んだ木箱はもうここには無いようだった。

疑問は膨らむばかりだったが、これ以上ここにいても得るものも無いので、ガスコンは樽を抱えながら静かにその場を立ち去る事にした。

黒衣の小男

その後、サリエリはどこへ向かったのだろう？　ウェルテは森の道を歩きながら考えた。到着の時間から考えて、サリエリはアグレッサを出てまっすぐにエルベ荘園へやって来たに違いない。だが、その後サリエリがどこへ向かったのかは判らなかったので、サリエリへ寄るように頼んだ、森の南側にあるバルテルミ村へと向かうことにした。そこへ行けばサリエリが訪れたかどうかも判る上に、もし訪れた時間が判ればサリエリの足取りがもっとはっきりすると思ったからだ。もし遅い時間帯に村を訪れたのなら、サリエリはどこか森の別の場所に寄ったことになるし、そうではなく午後の早い時間帯だったら、エルベ荘園から直接村へ向かったのだと見当がつく。

ウェルテは街道を目指して、もやのかかる細い砂利道を南へと向かった。バルテルミ村はアイアン街道を挟んだ森の南側にある、林業とわずかばかりの開墾地からなる小さな村だ。

荷車が行き交うアイアン街道を渡り、ウェルテは森の南側へと向かう。街道沿いで真昼間に盗賊に襲われるとは考えにくかった。四方へ伸びる街道はアグレッサの大動脈である。そこを荒らしまわる者が出てはアグレッサの経済に大きな影を落とす事になるため、領主フランツ・ド・ゾロッソは強力な職業軍人集団を雇って青騎士隊を組織し、市街と街道の治安維持に当たらせていた。粗暴で威圧的な彼等の剣の矛先は盗賊だけではなく、時に領主に反抗的な領民にも向けられることが多かったので、領内での評判は悪かった。しかし、この強力な武装集団によってアグレッサの安定が保たれている事も事実だった。そんな青騎士隊がよく巡回する昼間に盗賊がこの近辺に姿を見せるとは考えにくかった。

森を三十分程歩いた頃だった。鳥の鳴き声に混じって、ウェルテは左の方角から砂利を踏みしめる足音を耳にした。ウェルテは足を止め、その方角へと目をこらす。白く霧のかかった木々の間から、

男が歩いているのがうっすらと見えた。まだその男が危険人物かどうかは判らなかったが、ウェルテは木の幹に隠れて様子を伺った。
左の方から来た男は、ウェルテに気付かない様子で足早に歩いてゆく。ツバの短いチロリアンハットにゆったりとしたオーバーという姿で、大きな革の鞄を携えていた。痩せたロバのような面長の白い顔がはっきりと見え、ウェルテはその男を思い出した。
――あれは床屋のアンヘルム……
アグレッサの理髪店兼施療院で働く床屋だった。床屋がこんな森の中で何をやっているのだろうかとウェルテは訝しく思った。
街の住人を除き、施療院の床屋に治療や散髪を頼むにはかなりの金がかかる。それも、森の貧しい村に往診を頼めるほど豊かな者などいるのだろうか。ごく稀に、医者を兼ねる床屋が郊外に住む富農に呼ばれて往診に赴く事もあったが、これから向かうバルテルミ村にはそんな裕福な人間はいなかった。
それ以上にウェルテを怪しませたのは、その床屋の周囲を警戒するような素振りだった。ウェルテの存在にこそ気付かなかったものの、アンヘルムはやたら周囲をキョロキョロと見回しながら足早に歩いてゆく。ウェルテは相手に気取られないように、なるべく足音が立たないよう、固い木の根っこを踏みながら、アンヘルムの後を追って村へと向かった。
しばらく行くと、アンヘルムは村へ続く道ではなく、村のはずれへと繋がる小径へと入って行った。その方角には家屋はなく、村長が管理している共同の穀物倉が建っているだけだ。ウェルテは首を傾げながらも、もやで霞むアンヘルムの背中を静かに追いかけた。
やはりウェルテが思ったとおり、アンヘルムは村の穀物倉へとやってきた。その一角だけ木々が伐採されて開かれた真ん中に、葺き屋根、木造平屋の倉が建っていた。まるで見張り番のように倉のそばに立っていた男と挨拶を交わし、アンヘルムは促されるまま足早に倉の中へと入っていった。
ウェルテは遠くからそれを見届け、バルテルミの村落へ向かう事

にした。バルテルミ村の集金はウェルテの担当であり、村長とも顔なじみだった。元々、その村長に、サリエリの事も尋ねるつもりだったので、倉に床屋なんかを呼んで一体何をしているのか尋ねればよいと思ったのだ。村長が村の穀物倉で何をやっているのか知らぬ筈がないし、尋ねればこの不可解な事の正体も簡単に判るだろう。そう合点し、ウェルテは音を立てないようにその場を離れようとした。

もやの向こうから、やかましい犬の吠える声が聞こえてきたのはその時だった。思いのほか近い。ウェルテはぎょっとして立ち止まった。こんなに執拗に吠えかかるのは、狼か猟犬くらいのものだ。ウェルテは鳴き声の方角から逃れるように森の奥へ後ずさったが、その声はまっすぐ向かってきた。さらに左の方からも別の犬の吠え立てる声が迫ってきた。白いもやの向こうから大きな犬と引き綱を手にした男がウェルテへと向かってくる。左からも同じ様に、犬に先導された男がまっすぐウェルテに迫ってきた。

――猟師達か？

狼か野犬の襲撃だと思い身構えたウェルテだったが、人に連れられた犬だと判り緊張を解く。だが予想に反し、その男達は突進してくる犬を制止しようともしない。頭の高さがウェルテの腹部に届くくらいの、大きな茶色い犬が真っ赤な舌と白い牙を剥き出しにウェルテに飛び掛った。ウェルテは思わず悲鳴を上げて後ろへたり込んだ。ウェルテの喉笛を狙った牙が宙を噛み、犬の生温かい唾液の粒がウェルテの頬に当たった。引き綱を手にした男がギリギリのところで、後ろから犬を引っ張っていた。もう一匹もウェルテの鼻先のところで猛烈に吠え立てている。

耳がだらりと垂れた茶色と黒の毛並みのその犬は、引き綱がなければ今にもウェルテを食い殺さんばかりに、絶え間なく吠え、牙を見せつけた。大きな雄鹿に止めを刺すよう訓練された猟犬、ブラッドハウンドだった。

「この狼藉、何のつもりだ！」

ウェルテは声を震わせながら男達に怒鳴った。領主お抱えの猟師達は態度が悪く、横柄な事で知られていたので、犬が勝手に走り出したか、それともウェルテに性質の悪いからかいをしかけたのかとも思われた。だが、ウェルテはそれが間違いである事に気付く。男達は手にした綱で犬を引っ張りながら、険しい顔でウェルテを見据えている。二人とも革の丈夫なチョッキを着て、腰には軍用の帯剣ベルトを締めている。腰や手に猟具はなく、弓矢も持っていない。猟をしていたわけではないようだ。そして二人の男達は、空いた手でおもむろに腰から短剣を引き抜いた。

ウェルテは余りの事に驚愕しつつも後ろへ飛び退き、左腰からカップ状の護拳がついた剣を引き抜いた。ウェルテのレイピアは、流行の軽くてよくしなるレイピアではなく、刀身がやや肉厚でほとんど剣先が揺れない剣だった。剣で解決すべき完全に手荒な事態へといきなり飛び込んでしまった事をウェルテははっきりと自覚した。

「やるつもりか！」

ウェルテはそう叫びながら。レイピアの剣先を近くのグレイハウンドの鼻先で振った。風切り音とともに犬はひるんで後ろへ飛び退く。すかさず二頭目の鼻先にファンデブ（突き）を繰り出すように踏み込み、鼻先で寸止めした。やかましい二頭の獣は一旦、萎縮したように退いたが、尚もウェルテに牙を剥いて吠えかかる。

ウェルテは中段に剣を構えたまま、広く間合いをとった。レイピアにとって大切なのは突きに適した間合いだった。男達はウェルテを斬りつけようと、短剣を構え左右から挟むように間合いを詰めてきた。多勢に無勢、人間二人ならなんとか対処できるが、犬が厄介だった。最初に犬を倒し、その後人間をやっつけるしかない。

ウェルテが剣を一振りしつつ、右腰のマンゴーシュへと手を伸ばした時、背後で土を蹴る音がした。ウェルテは気配を感じ、自分の隙を呪った……　剣を後ろへ振りたかったが、もう間に合わない。背後からの重い衝撃が腎臓の辺りにぶつかり、体中に伝染するように痛みが走った。思わず前方へ突っ伏しそうになり、ウェルテは膝

立ちになった。即座に金属の冷たい感触が右の首筋に当たる。黒い革手袋が視界に入るや、背後からウェルテの頭を上へと引っ張り上げた。かすかに果物のような香りがした。
「一人でノコノコといい度胸だ。貴様のような奴を寄越すとは、ギルドも焼きが回ったようだな！」
背後の敵がウェルテの耳元で叫んだ。
――や、やられた……
押さえつけられたウェルテは、寒気のするような絶望感に襲われた。
身動きが取れないので視線を巡らすと、自分の首筋には細い鋭利なダガーの剣先が突きつけられている。ウェルテの左手は右腰のベルトに吊った短剣の柄を掴んでいたが、今からそれを引き抜いても、背後の敵を突き刺す余裕はないだろう。
あまりに呆気ない結末に、ウェルテは恐怖よりも情けなさを感じていた。森に入る前、盗賊に出くわしたら斬ると豪語していた、つい数時間前の自分が酷く滑稽に思えてきた。盗賊を斬るどころか、もうすぐ自分もサリエリと同じ様に、この卑怯で野蛮な、動物じみた感性しか持ち合わせていないならず者に殺されてしまうのだろう。
――こんなことなら、ガスコンに一緒に来てもらうべきだった……
眼前の敵と自分の認識の甘さを呪いつつも、ウェルテはだんだん腹の虫が収まらなくなってきた。
「昨日、森で徴税吏を殺したのはお前達だな！　こんな真似して、ただで済むと思うな盗賊ども！」
ウェルテは精一杯の怒鳴り声を張り上げる。黒い革手袋がウェルテの首を更に強く締め上げた。
「貴様、自分の立場が判っていないようだな！　そんなに死にたいか！」
背中にいる敵も感情的になって怒鳴り返した。ウェルテの頸動脈の上をなぞっているダガーの剣先が強く押し当てられ皮がすりむけた。背中の敵は、まだ声変わりも迎えていないような澄んだ声音の人物だった。確かにウェルテの首や肩を押さえている敵の腕は、筋骨隆

々とは言い難く、力こそあるがむしろ華奢なほうだ。そんな年端もいかない小僧に背中をとられ、これから不条理にも殺されると思うと、ウェルテは不安と悲しさ、悔しさでたまらなくなった。
――ヴァン先生、せっかく教わった剣術を使う間もありませんでした。やっぱり、人生は騎士道物語のようにはいかないようです……
ウェルテが覚悟を決めた時、後方から叫び声が聞こえた。
「お待ちくださいー！　どうか、どうか剣をお納めください！　お願い致します」
穀物倉の方からに初老の老人が走ってきた。継ぎ当てだらけの粗末な毛織物の衣服をまとったその老人はウェルテの眼前で跪くと、両手を出して訴えた。
「申し訳ねぇです、スタックハースト様。これはひどい手違いなんです。皆さんも、どうかこの方をお放ください」
白髪、無精ひげの小汚いこの老人は、ここバルテルミ村の村長を務めるポール・ラムジーで、ウェルテが徴税の為に村へ訪れる度に会っている顔なじみだった。
「お願いします。そのお役人様はここの当番の徴税吏様で、自分らが年貢のやりくりがつかない時には、いつも良くしてくれる優しいお方なんです。だからどうか、今回はお見逃しくださいませ」
老人はそう懇願した。犬を連れた男達は呆気に取られてお互い顔を見合わせる。
「何？　徴税吏だと？　じゃあオストリッチの……クッ」
背後から悔しそうな声が聞こえたかと思うと、首の拘束と短剣が解かれ、ウェルテは背中を強く蹴飛ばされた。前のめりに倒れたウェルテを、老人が慌てて抱き起こす。
「本当に申し訳ねぇです。どうか堪忍してくだせぇ」
ウェルテは咳き込みながらも、剣を掴んだまま敵へと振り返った。
ウェルテは、自分を締め上げて短剣を突きつけた者を憤怒の形相で睨みつけた。
やはりウェルテが思ったとおり、敵は自分よりも背の低い細身の

男だった。声つきから判断するにまだガキに違いない。黒いシルクのクロークに黒いブーツ。口元に黒いネッカチーフを巻いて顔を隠しているが、ウェルテを睨むその右の目には、まだ若いくせに銀縁のモノクル（片眼鏡）が光っている。それ以上にウェルテの目を引いたのは、その男が目深に被る黒いファーフェルトのキャバリアー・ハットに映える、鮮やかな孔雀の羽飾りだった。教会の聖楽団でコーラスをやっていそうな声音やその裕福そうな風貌を見るに、とても盗賊には見えなかった。背丈や声から察するにまだかなり若いに違いない。

「この、クソガキめ！」

ウェルテは、頭のてっぺんから足元まで全身黒ずくめのその小男へ剣先を向けるが、ブラッドハウンドを連れた男の一人がウェルテの首に短剣を突きつけた。ラムジー老人が慌ててウェルテの腕を掴んだ。

「ああスタックハースト様、どうかお怒りをお鎮めください。すぐにご自由に致しますので、どうかご冷静に」

「これが冷静にしていられる状況か！」

敵のもう一人がウェルテへと手を伸ばす。

「武器を預かる」

首筋に剣を突きつけられているので、ウェルテはため息をついてレイピアを地面に置いた。男は素早くレイピアを拾い、ウェルテの右腰のマンゴーシュを鞘から抜き去った。

「あとできちんとお返しいたします。だから今しばらくお待ちくだせぇませ」

ラムジーは何度もウェルテに頭を下げると、黒服の小男を少し離れたところへ連れて行き、早口でなにやら説明しはじめた。老人がまくしたてている間に、黒服はモノクルのレンズ越しに、疑い深そうな視線でウェルテを見つめていた。

騒ぎを聞きつけたのか、穀物倉から出てきた数人の男達がウェルテの方を眺めている。その中には、先程ウェルテが後をつけていた

床屋のアンヘルムがこの騒ぎをびっくりした様子で見つめていた。施療中だったらしくシャツの両腕をまくっている。よく見ると、周囲には腕や頭に包帯を巻いた者も見える。どうやら、けが人が多くいるようだ。

そんななか、もやのかかった道の奥から馬が土を蹴る音が聞こえてきた。栗毛の馬に乗った男が森からあらわれ、穀物倉の前で馬から飛び降りる。細い剣を腰に吊るした皮の鎧姿のその男は、馬の手綱をそばの仲間に委ねると、息を切らしてやってきた。

「申し上げます！　アイアン街道東方にて青騎士隊が集結しつつありと……」

その男は、黒服の前に跪くと慌てて報告した。離れたウェルテが聞き取れたのは最初のそのフレーズだけだったが、報告を受けた黒服とそばにいたラムジーはにわかに慌て出した。

「荷物をまとめて、大急ぎで退去するぞ！　まず歩けない者から馬車に。急げ！」

教会にいる聖歌隊の少年みたいな声で、黒服はそう叫んだ。

周囲にいた者はみな慌てつつも、急に動き出した。男の一人がホイッスルを三回鳴らした。穀物倉からは、数人のかなり重い傷を負っている者達が板に乗せられて運び出されてきた。穀物倉から出てきたその他大勢の男達は、倉から大きな木箱や布包みを抱えて外へと運び出している。中には長い剣やレイピア、弓を運び出してくる者もいる。バルテルミ村の集落に通じる道からは荷馬車が三台やってきた。床屋のアンヘルムが介抱する中、負傷者達を馬車に乗せると、次に男達はそれらの荷物を馬車に積み込みはじめた。

――一体、この慌てようは何だ？

ウェルテは地べたに座ったまま、この騒ぎを眺めていた。ただ、盗賊なら治安維持にあたる青騎士隊の接近に恐れをなすのは当然の事だ。ウェルテの今の状況を考えても、青騎士隊の接近は歓迎すべきことだった。

「ハトを忘れるな！　その他の持ってゆけない物は全て燃やして」

黒服がそう命じた。穀物倉の横に、いつの間に建てたのか粗末な小さい鳩舎があった。そこから男達はいくつもの鳥篭を荷馬車にと乗せる。

――この村、いつからハトの飼育なんか始めたんだ？

その様子を見ながらウェルテは思った。ハトは貴族や聖職者、商人に人気のある高級食材だ。他所の町ではハトの肥育で成功し豊かになった村や商人もいる。ハトの飼育に成功すればこの村はもっと豊かになるに違いないとウェルテは思った。

八方へ指示を出していた黒服がウェルテのほうを向いた。

「その男を縛り上げろ」

「おい、どうするつもりだ！」

ウェルテが抗議の声を上げるが、命令一下すぐに子分の男がウェルテを後ろ手に縛り始めた。

「この者の始末はあたなに任せます。我々はすぐに出発する」

「ありがとうごぜぇます……　どうかお気をつけて」

ラムジーはそう言って黒服に深々と頭を下げた。

「迷惑をかけて申し訳ないけど、そっちも気をつけて」

そう言うと黒服はウェルテに険しい一瞥をくれてから、穀物倉へと足早に去っていった。

ラムジーはウェルテのレイピアと短剣を抱えると、縛り上げられているウェルテへまたも頭を下げた。

「スタックハースト様、ほんと何てお詫びしたらいいのか……　これから街道までお送りいたします」

そう言って、ウェルテは縛られたまま、村長に抱えられるようにバルテルミ村をあとにした。

不自由な格好でラムジーと歩いていると、ウェルテはだんだん腹の底から強い怒りが湧き起こってきた。どうやら殺される心配も無くなったので、恐怖や不安よりも、むかっ腹のほうが勝ってきたのだ。

「確かに、徴税吏だから好かれないのは判っている。でも、こんな酷い目に遭わされる理由は無い！　家令の遣いが収穫高の抜き打ち検査をしようとした時だって、アカバス先生と一緒に知恵を絞って力を貸したじゃないか！」
怒鳴るウェルテに、老人はなんとも辛そうな顔をして下を向いた。
「あん時のことは……　村人一同ほんとに感謝してます。一時だって忘れねぇです。今回の事は悪魔の企んだひどい運命の悪戯みたいなもんです……」
信心深い農民の発する、坊主の説教みたいな返答はウェルテの怒の炎に油を注いだだけだった。
「何が悪魔だ！　一体あいつらは何だ？　いつから盗賊団を村に抱え込んだ？」
村長は、盗賊団なんてとんでもないと慌てて首を振る。
「違ぇます、違ぇます！　あのお方達はそんな悪人じゃありません。この私が天に誓って約束します」
ウェルテの堪忍袋の緒も限界だった。
「悪人じゃない奴等が、通行人を襲ってこんな事をするか？　しないだろ！　それに、盗賊団じゃないのに青騎士隊をあれほど恐がる理由があるか！」
「そ、それは……　い、今は言えねぇ理由があって……」
歯切れの悪い老人の言葉を遮るようにウェルテはさらに怒鳴る。
「昨日、僕の代わりに集金に訪れた役人がこの近くで殺されたんだ。サリエリって男がバルテルミ村にも来ただろう！　それをお前達が殺したんだ！」
目に怒りの炎をたぎらせてウェルテは村長を睨みつけた。ウェルテの顔を見て村長は真っ青な顔でかぶりを振る。
「と、とんでもねぇ！　そ、そんな恐ろしい事。そんなお方、知らねぇです！　それに、昨日は誰もお出でじゃねぇ！　もし来たとしても、そんな、殺すなんて……　自分も、あのお方達も絶対にしねぇ。ほんとです！」

「村長がやらずとも、あの連中ならやりかねないだろ！　今回の辱め、決して忘れないからな！」
普段はとても温厚なウェルテが今にも食い掛かりそうな剣幕で睨むので、村長はとうとう絶句してしまった。
　その後二人はしばらく、黙って森を歩きつづけた。ようやく、頭に上った血も下りてきたのか、ウェルテは少し冷静さを取り戻した。ラムジーの言葉を信じるならば、昨日サリエリはバルテルミ村へは来なかった事になる。そうなると、サリエリは、エルベ荘園からバルテルミ村へと至る道中のどこかで殺害されたのだろうか。
「あのぉ、スタックハースト様。そろそろ街道です。自分はここらで村に戻ることにしますが……」
村長が言うので、ウェルテは縛られた後ろ手を見せた。
「……早くこの手の綱を切ってくれ」
村長はウェルテの剣を地面に置き、なぜかロープを取り出した。
「あの、スタックハースト様。大変申し訳ねぇですが、お足も縛らせてもらいます」
そう言うなり、ラムジーは農夫特有の怪力でウェルテを突き飛ばした。そして、羊の毛を刈る下準備の要領で、暴れるウェルテの両足首をあっという間に縛り上げた。
「お前は、大嘘つきだ！　はじめからこういう魂胆だったんだな！」
つつかれた芋虫のようにジタバタ暴れるウェルテへ、ラムジーは泣きそうな顔で詫びる。
「すんません、すんません！　これが一番いい方法なんです。このお詫びはいつか必ず……」
ラムジーはそう何回も頭を下げると森の奥へと逃げていった。
　ラムジー老人が去った後、両手両足を縛られたウェルテは、呆然と森の中に寝そべっていた。とりあえず命は助かったようだが、まったく身動きがとれない。近くのには抜き身のレイピアとマンゴーシュがあるので、縄を切るためそこまで転がってみたが、どうにも、うまく柄を掴む事ができない。

ここはもうアイアン街道のすぐ近くで、石畳を叩く馬の蹄の音や馬車の音も聞こえるが、何度叫んでも、誰かが助けに来てくれる様子は無かった。森の奥からは角笛の音が何度も聞こえる。一体何が起きているのだろう。

しばらくすると、多くの馬の歩く音が森から聞こえてきた。

「誰かー、助けてくださいー！　誰かー、助けて！」

寝転がったままウェルテが叫ぶと、馬の足音はどんどん近づいてくる。

数頭の馬の脚と、あぶみにのった拍車付きのブーツが視界に入った。

「よかった！　助けてく……」

身を捩ってなんとか上を見上げたウェルテは言葉を詰まらせた。

その馬上の男達は、鈍く輝く胸甲に青いクロークをまとい、腰には長剣、頭には青い羽飾りの三角帽を身に着けていた。悪名高いアグレッサ青騎士隊だった。

「た、助けてくれ！　盗賊にやられた！　盗賊め、バルテルミ村を乗っ取って根城にしているようだ。急いで捕まえてくれ」

普段は関わりたくない相手だが、今は一番頼りになりそうな連中だと思い、ウェルテは男達を見上げながら叫ぶ。

青騎士隊の騎兵達は不思議なものを見るような顔でウェルテを見ている。

「隊長、こちらへ！　怪しげな男を見つけました」

「待ってよ！　怪しくない。徴税役場のウェルテ・スタックハーストだ」

ウェルテの抗議をよそに、隊列の後ろから青いマントを羽織った男がやってきてウェルテを見下ろした。腰には時代遅れのごついロングソードを佩き、マントの下には同じく流行遅れなプレートアーマーを着込んでいる。右顎の深い裂傷の痕を口元のヒゲで隠したその顔は、ウェルテも何度か街中で見たことがあった。

――クラレンス・ガイヤール……

血も涙も無い冷血漢として知られる、青騎士隊の隊長だった。
「早く縄を解いてくれ。バルテルミ村に賊がいる」
ガイヤールは酷薄そうな灰色の目でウェルテを見下ろしながら、それには答えずに部下へと指示をとばした。
「二小隊をバルテルミ村へ回せ。怪しい者は全員捕らえろ」
すると、森の奥から早足で駆けて来る蹄の音が響いてきた。
「申し上げます！　バルテルミ村の方面より大きな煙が立ち昇っています。火災が発生しているようです！」
「わかった。我々は南、東、北の三隊に分かれてバルテルミ村へ向かう。不審な者は全て捕らえろ。抵抗するならば即座に殺せ。伝令！　ノックス砦から応援を出し、西方から森を探索させろ」
伝令は了解し馬の頭を回して早足で去ってゆく。ガイヤールの横にいた騎士が角笛を吹き、命令を伝え始めた。
　再び、ガイヤールの灰色の目がウェルテへと向けられた。
「この男は城に連行し、厳しく取り調べろ」
「ちょっと、ふざけるな！　こっちは被害者だぞ！」
先程と異なり、ウェルテの叫び声にはいくぶん恐怖の色が混じっていた。抗議も虚しくウェルテは、武装した歩兵二人に掴み上げられ、街道の方へと引きずられていった。

マン・アット・アームズ

夕刻、ウェルテは縛り上げられたまま馬に乗せられてアグレッサへと帰ってきた。ツリガネソウの花のような形の鉄兜であるモリオンをかぶった青騎士隊の歩兵に引っ立てられ、ウェルテはまるで引き回し中の罪人のような有様で街の西門をくぐった。

街を暴力で牛耳る、泣く子も黙る青騎士隊の隊列を前に、アグレッサの市民達は無言で道を開ける。隊列を見送る人々のなかには哀れみの眼差しでウェルテを見送る人も多かった。ウェルテはもう二年もアグレッサで暮らしてきたので、青騎士隊の恐さや野蛮さはよく判っていた。なので、さっき森で黒服の一団に襲われた時以上に身の危険を感じていた。青騎士隊が、罪人の容疑がかかっている者もしくは意に沿わぬとみなした者をどう扱うか、火を見るより明らかだったからだ。

青騎士隊。騎士隊長であるクラレンス・ガイヤールに率いられ、アグレッサ領主フランツ・ド・ゾロッソによって雇われた武装集団である。彼等は、通称マン・アット・アームズと呼ばれる職業軍人層が集まって組織された傭兵団を前身とする軍事組織で、軍事力増強と領内の支配強化の為、領主フランツのよって雇われた軍事警察組織だった。マン・アット・アームズにはガスコンのような戦いを生業としても、特定の雇い主や所属先を持たない者達も含まれることもあったが、多くの場合、領主や傭兵団もしくは商人や富豪の私兵として俸給をもらい生活する者達を指してそう呼んでいた。

青騎士隊も領主お抱えの常備軍として雇われたマン・アット・アームズの集団であったがここしばらくの間、アグレッサの近隣では戦争は起こっておらず、青騎士隊は専ら、盗賊狩りをはじめとする領内の治安維持と防衛を主任務としていた。

特に領内の治安維持での悪名は猛威を振るっていた。アグレッサには古くから街に根付いた警吏隊が組織されていたが、青騎士隊が

組織されてからはその権威のほとんど譲ってしまったような状態だった。青騎士隊は領主の手となり足となり、徹底した『力の支配』で領民を押さえつけた。

苛酷な税の取り立てに耐えかね、家令に直訴しに城を訪れたある村長は、青騎士隊に捕らえられ城内の尋問所にて溶けた鉄の靴を履かされ、溺れなければ赦免するという条件で街の北を流れるローラント川に放り込まれた。

また免許税を払わずに勝手にワインを醸造したと疑われたある酒屋は、凄惨な拷問の末に自供し、最後には三日間餌を抜かれた軍用犬の檻の中へ棄て置かれた。

もっとも酷かったのは、教主の逆鱗に触れ南部のグライトから逃げてきた『異端』と呼ばれる人々がアグレッサへと逃れてきた時だった。北部へと逃れようとする彼らを、教会より命を受けた領主フランツは青騎士隊を使い徹底的に弾圧した。ウェルテを始めとする街の市民には噂でしか伝わってこなかったが、西部の霞の森を逃れようとした人々は青騎士隊の包囲に遭い、そこでは、ありとあらゆる人間の悪が行われたという。夕刻、血まみれの剣や槍を手に、どす黒く染まったサーコートを身につけた青騎士隊の兵士達は、教会の宗教画に出てくる魔物の軍団そのものだった。

人込みの多い所へさしかかったので、ウェルテは大きく息を吸い込むと急に叫び出した。

「徴税吏のウェルテ・スタックハーストだぁぁぁ！　誰か、今すぐ徴税役場のぉ、ルイス・アカバス博士に知らせてくれぇ！　誰かぁ！　僕は徴税吏の……」

頼みの綱は上司のアカバスしかいなかったのだ。ウェルテは声が枯れんばかりに、何度も叫ぶ。幸運にも兵士にさるぐつわをはめられる前に、人込みを掻き分けて同僚の男が走ってきた。

「ウェルテ！　一体どうした！」

「判りません！　とにかくこの事をアカバス先生に！　うぐぐ……」

乱暴にさるぐつわを噛ませられそれまでだったが、その同僚は役場

の方へ走りながら叫んだ。
「今すぐ行って来る。安心しろ！」
ウェルテを連れた一隊は、空堀にかけられた跳ね橋と落し格子で守られたアグレッサ城の大手門をくぐって城の敷地へと入った。城壁でかこまれた空間には青い芝が敷かれ、その中心には、城塞らしからぬ瀟洒な館が建っていた。それはもう城郭と呼べるものではなく、完全に住み心地を優先して建てられた白亜の屋敷であった。一方、屋敷の右奥には昔ながらの石積み城塞建築の丸い塔が立っていた。その頂上は城壁を越えて外をみまわせるくらい高い。アグレッサ城が戦の拠点だった時代の城の中心部である主塔だった。その主塔の下層が青騎士隊の詰め所だった。
あれから数時間。ウェルテは主塔地下にある地下牢脇の尋問所で、縛られたまま粗末な丸イスに座らされ、周囲を取り囲む兵士達に何度も今日一日の行動を説明した。薄暗くてじめじめしたその部屋は、天井から吊り下がった鎖や大きなノコギリ、拘束具の付いた磔台など、正視したくない気持ち悪い道具で一杯だった。
最初、ウェルテは極力、協力的に森であったことを説明した。悪臭漂うこの尋問室から一刻も早く出たかったし、その供述で青騎士隊があの憎き黒服の一団を成敗してくれればウェルテの腹の虫も少しは収まるというものだ。サリエリの死やエルベ荘園の粉屋に会った事、バルテルミ村へ行く途上で床屋のアンヘルムを見かけたこと、そこで猟犬を連れた黒服達に襲われ拘束されたいきさつまでを全て説明した。もっとも、腹は立っているものの一応は自分を助けてくれた村長のラムジーについては、顔なじみの情けで敢えて青騎士隊の前では名前を出さなかった。盗賊に協力している容疑で取り調べられる事になれば、凄惨な拷問にかけられることは目に見えていたからだ。
だが、兵士達は一向にウェルテを解放しようとはしなかった。兵士達はこれ以上何を聞き出したいのか、ウェルテを警戒するような目で見ながら黙っている。

「知っている事は全部話したんだから、早く帰してくれよ」
小隊長らしき三角帽の男は腕組んだまま、黙ってウェルテを見つめているだけだ。
――こいつら言葉通じてるのか？
何の感情の片鱗も感じさせない態度に、ウェルテはちょっとした薄気味悪さを感じた。
「お前、本当にそれだけの目的で森へと行ったのか？　なにか別の目的もあったとも考えられるな？　どうなんだ？」
ウェルテは眉間に皺を寄せて相手を睨んだ。
「別の目的って何だよ！　徴税吏なんだから担当の村を回るのは当然の事だろ？　それじゃなくたって昨日、森で仲間が一人殺されているんだ。こっちを問い詰める前に、バルテルミ村にいた妙な奴らを捕まえるのが先だろう」
とうとう我慢しきれなくなりウェルテは怒鳴るが、相手は返事すらしなかった。ただ、周りの兵士達は何をするのか、急に手際よく準備をはじめた。部屋の隅にある炉に炭を入れて火を起こし、そこへ何本も焼きゴテを放り込む。ある者は、錆だらけの大きなハサミや包丁、ノコギリを並べ、磔台の革ベルトを解き始めた。
「お、お前ら正気か！」
ウェルテは自分の声が震えている事に気がついた。
　尋問室の入口に騎士隊長のガイヤールが姿をあらわした。小隊長が小声でなにやら報告する間、ガイヤールは灰色の目でずっとウェルテを見つめていた。報告が終わるとガイヤールは無言でうなずいた。
「はじめるぞ！」
小隊長が命令し、兵士達は縛られたままのウェルテを引っ張り起こす。
「ふざけるな、この野郎！　全部話したって言ってるだろう！」
ウェルテは力の限り暴れて抵抗したが、容赦ない鉄拳が腹にめり込み、ウェルテは意識を失いかけた。

ショックで視界が白くちらつくなか、ようやく入口の方から聞き慣れた怒鳴り声が響いてきた。
「そこをどかないか、このでくのぼうめ！」
それはウェルテがここしばらく待っていた声だった。クロークを翻して靴音高く、兵士を押しのけて尋問室に押し入ってきたのは徴税代官のアカバスだった。アカバスはすっかりのびているウェルテの様子を、鼻めがねに手を当てて覗き込むと、そばに立っていたガイヤールへと詰め寄った。
「仮にも徴税役場に勤める者へのこのような暴行、よもや許されるとでも思っているのか？」
ガイヤールは壁によりかかったまま顎を突き出した。
「ルイス・アカバス博士。こと領内の秩序維持について、我々は御館様より特別の権利を頂いている。取調べの邪魔はしないで頂きたい」
アカバスは口を歪めた。
「言うな、ガイヤール……　よかろう、ならばこちらも御館様に伝えねばならんな。青騎士隊が徴税吏を不当に虐待したため、税の徴収に甚だ障害をきたしていると……　そのうえ集金途中の徴税吏が殺害されたというに、下手人の賊一人捕らえられんとは情けない」
アカバスの言葉に、ガイヤールは初めて感情的な、苦々しい表情を浮かべた。ガイヤールも、御館様こと領主フランツが税の徴収には人一倍の執着とこだわりをもっている事を知っていたので、徴税代官であるアカバスがフランツへ直訴するような事態は避けたかった。
「そいつを放してやれ」
ガイヤールは配下の兵士達へ命じた。ウェルテは乱暴に地面へ放り出されると、数時間ぶりに腕の拘束を解かれた。
「ガイヤール、今回だけは大見に見てやる。だが、次に部下に手を出したら、簡単には済まさんぞ」
アカバスはそう言うと、ふらついているウェルテを抱え上げた。ウェルテは兵士の手から自分の剣やクロークを奪い取った。そして、

ガイヤールの殺意に満ちた視線を背に受けながら、アカバスと共に尋問室を後にした。
　アカバスとウェルテの二人は主塔の廊下で、兵士達に引っ立てられてきた別の男とすれ違った。真っ暗な石壁の向こうから来た男の顔が、壁の松明に照らされてオレンジ色に映った。
「お前は……」
ウェルテは思わず声を発したが、その男は黙したままただじっと前を向いて、尋問室の方へと連行されていった。黒髪で蒼白の顔のその男は間違いなく、ウェルテが昼間森で見かけた床屋のアンヘルムだった。どうやらバルテルミ村から逃走に失敗し捕らえられたのだろう。
アンヘルムのその顔には全ての事を覚悟し、屈服を拒絶する強い決意の色を湛えているようにウェルテには感じられた。
　ウェルテ達は寒くて重苦しい空気の主塔から中庭へと出てきた。もう完全に夜になっており、城壁に囲まれた空には月が出ている。ウェルテは寒さを感じ、クロークを羽織った。
「森へは行くなと言ったはずだ！　この大馬鹿者！」
ウェルテへ振り返るなり、アカバスはいきなり怒鳴った。あまりにも急に、激しい調子で怒鳴られたので、ウェルテは呆気に取られた。
「私がいたからよかったものの、そうじゃなければ、どうなっていた！」
「す、すみません……」
ウェルテには返す言葉も見つからなかった。
「なんで森へなんぞへ行った！　悪くすれば今ごろあの野蛮人どもに八つ裂きにされているところだ！　マン・アット・アームズだかなんだか知らんが、あのならず者どもめ！　腹が立ってならん」
もっぱら学者畑一本で生きてきたアカバスは普段から、青騎士隊に代表される粗暴な職業軍人階層の人間が嫌いだった。
「明日からは街の外へ出ることは許さん。しばらくは細々とした雑用のみをしてもらう。ところで……」

アカバスがそう言いかけたとき、背後の主塔からこの世のものとは思えないぞっとする悲鳴が聞こえてきた。それは間違いなく尋問室へと連行されたアンヘルムの叫び声だった。アカバスとウェルテは背後の主塔を振り返った。人間にとって最悪の悪徳の一つである拷問が始まったのだ。

「スタックハースト、とりあえず外へ出るぞ……」

「はい……」

顔を青くした二人は無言で城外へと歩き出した。絶望的なその悲鳴は二人が主塔から離れるまで断続的に響いてきた。

大手門の跳ね橋を渡ってから、ウェルテは今日一日に経験した出来事を簡潔にアカバスへと報告した。アカバスは真剣な表情で話を聞いていたが、バルテルミ村のラムジー老人が盗賊の仲間だったという話を聞いたときには特に驚いた顔をした。

「あの男は昔から知ってる。とても正直者の男なんだが……」

「僕も今日までそう思っていました……　サリエリの足取りが少しだけ判ったことだけは収穫でしたが」

アカバスは、そうだなと一言だけ言って、考え込むように唇を噛んだ。アカバスはカンテラに火を入れるとウェルテへと渡した。

「腹もすいているだろうが、今夜だけは寄り道をせずまっすぐ下宿へ帰れ。いいな？」

ウェルテはうなずいた。ものすごく空腹だったが、アンヘルムの悲鳴を聞き、食欲は完全に失せていた。考えたくはないが、一歩間違えば、自分が同じ目に遭うところだったのだ。それに夜の街は危険が多い。青騎士隊や警吏がいくら目を光らせても、都市の秩序維持は不完全だった。

ウェルテはアカバスに礼を言うと、真っ暗に静まり返った道をカンテラを手に足早に歩き出した。

鋼の国のマスターピース

アグレッサ城に面する西側にはこの街の富裕層や豪商が居を構える住宅街が広がっている。そのなかでも一際立派な屋敷が、アイアン街道の直ぐ北側に建っていた。五階建て総石造りの立派な屋敷の扉の上には、アンバランスに足の長い怪鳥の紋章のレリーフが飾られている。そこはアグレッサ荷車ギルドの組合長であるアドリアーノ・オストリッチの邸宅であった。

ロの字型の大きな建物の真ん中につくられた石畳の中庭で、ナイジェル・サーペンタインは遅めの朝食をとっていた。昨夜は日付が変わるまで、町の北にある歓楽街で踊り子相手に酒を飲んでいて、逗留場所であるこの屋敷へとやってきたのは空がうっすらと明るくなった頃だった。

部屋着である白いリネンのシャツ姿でアンティークの高価な寝椅子に寝そべったまま、ナイジェルは器に盛られたチーズや果物をつまんでいた。昨日と打って変わり、今日は非常に良い天気だった。

「おはようございます、ナイジェル卿」

でっぷりと太った背の低い男が中庭へとやって来て恭しく礼をした。上物のガウンにシルクのシャツ。禿げかかった頭髪はきちんと香油で固められ、口ひげは手をかけて整えられている。ごつい両手には東西のあらゆる宝石をちりばめた指輪がいくつもはめられている。この屋敷の主であるアドリアーノ・オストリッチだった。

「朝早くに迷惑を掛けたな。町娘が酒場からなかなか帰してくれなかったのだ」

ナイジェルはあくびをしながら言った。オストリッチは愛想のよい笑みを浮かべて、もう一つの寝椅子へと寝そべった。すぐに女中がオストリッチの分である軽食を乗せた盆を持ってきた。

どういうわけか最近、富豪たちの間では古代文明の習慣にならって寝ながら食事をするスタイルが流行りだした。どこかの街の年老

いた成金は、そうやって食べ物を喉に詰まらせて死んでしまったという笑い話まで伝わってきている。
「ナイジェル卿、南部の街は如何でしたか？」
「何もかも垢抜けていて実に結構だ。食べ物も豊かで、流行の服もすぐ手に入る。領地に引き篭もっていてはとてもできんことだ。このままウィングレットへ帰らず、またグライトやエスカルへ戻りたい気持ちだ。ところでオストリッチ……　そんな私をわざわざエスカルから呼び出したのだから、さぞや良い品が手に入ったのであろう？」
ナイジェルはぶどう酒の杯を掴みながら言った。
「もちろんですともナイジェル卿。まずは届いたばかりの品をお見せいたします」
オストリッチが手をパンパンと叩くと。すぐに女中が盆に短剣を乗せてやってきた。オストリッチはそれをナイジェルへ見せるよう命じる。
「どれどれ……」
ナイジェルは椅子の上へ身を起こすと短剣を取り、じっくりとあらためた。柄も鞘も良く磨かれて、確かに手はかかっているし造りはしっかりしているが、特に飾りが豪華なわけでもない普通の短剣に見えた。ナイジェルが鞘から剣を抜くと、曇り一点も無く研磨された刃が姿をあらわした。ただ、肝心の刀身に二つ切れ込みが走っている。
「強く外側へと振っていただければ判ります」
オストリッチは怪訝な顔をしたナイジェルへと言った。言われたとおり剣を強く振ると、遠心力で切れ込みから刀身が分かれ、根元のヒルトを基点に刃が三又に分かれた。
「おお、これは……」
「クロコダイル鋼でつくりましたトライデント・マンゴーシュ。一昨日、西方のメタルの街から届きました今年の新作でございます」
「クロコダイル鋼……　なるほど」

ナイジェルは短剣を左手に持って、敵の剣を払うように振り回してみた。
「重さのつりあいも素晴らしい……」
デルブレー山脈を越えた西方には、良質の鉄鉱石と石炭を産出し金属加工産業で栄えている、その名の通りメタルと名付けられた工業都市がある。そこで作られた、ある優れた等級の鋼は、硬い皮を持つオオトカゲにあやかりアリゲーター鋼と名付けられていた。アグレッサや他の街の鍛冶屋達もこぞってメタルの冶金技術の真似をして、より良質の鉄製品を作ろうとしてきたが、アリゲーター鋼より品質の落ちるケイマン鋼やリザード鋼と呼ばれるレベルの鉄しか作ることができないでいた。
「ナイジェル卿は以前からマンゴーシュやパリーイングダガーの収集に熱心であられると伺っておりましたので、今回特別に取り寄せさせた次第でございます」
刃を日にかざしたり、柄の細工の刃のきめ細かさを覗き込んでから、ナイジェルは軽くうなずいた。
「確かに悪くはないようだ。しばらく借りておくとしよう。しばし身に付け気に入ったら引き取ろう」
「その剣は観賞用としてだけでなく、実際に敵と刃を交える時にも使い手を後悔させない物と思います。とある貴婦人をかけて決闘をなさった際の貴方様の武勇伝は私どもの耳にも届いておりますよ」
オストリッチの言葉に、ナイジェルは小さくため息をついて三又短剣の刃を折りたたんだ。
「いや、それは違うぞ。そもそも、問題になったのは貴婦人ではないただの酒場の女だ。それに決闘で相手を切り倒したのは私ではなく、代役になってくれた友人達だ」
「なんと……」
ナイジェルは思い出したように笑った。
「私は剣の師にはまったく恵まれなかった……　師は私によく言ったものだ……　お前は剣術など学ばなくていい、替わりに決闘ゴッ

コで負けない方法を伝授してやろうと、な。スモールソードをいかに優雅に抜き、より美しく剣をさばき、相手の体をちょっと傷つける術さえ学べばそれでいいとのたもうた」
そう言ってナイジェルは笑ったので、オストリッチも釣られて笑い出した。
「今日か明日には更に貴重な品が西方より届く予定です。特に……」
「失礼致します、旦那様」
不意にオストリッチ商会の執事であるアロンゾがやって来て、主人に紙切れを渡した。オストリッチの顔色が一瞬だけ変わった。
「大変申し訳ありません、ナイジェル様。急に仕事の雑事が舞い込んできてしまいました。どうかごゆるりとおくつろぎください。もしお出かけになる場合には家の者へ。すぐに馬を用意させますので」
「ああ、構わん」
早足に母屋のほうへと去っていく主人と執事を見送り、ナイジェルはマンゴーシュをテーブルに置いた。たとえ武器とはいえ飾り気に乏しいその短剣は決してナイジェルの趣味に合う物ではなかったのだが、あとでウェルテやガスコンに見せびらかすには丁度良かった。
胃が満たされると急に眠くなってきた。陽光が暖かかったのでナイジェルは寝椅子へと横になりゆっくりと目を閉じた。

意趣返し

もう間もなく夕方になろうとする頃、街はもっとも忙しなく賑やかな時間を迎える。道には、まだ終わっていない仕事を済ませてしまおうとする人々が早足に行き交い、家々のおかみさんや女中が夕飯のために市へと繰り出していた。

この日、丸一日を市内でアカバスの小間使いをして過ごしたウェルテは早めに帰宅を許された。役場の前では、飾り物同然の安レイピアを腰に差したガスコンが籐籠を抱えて、ウェルテが出てくるのを待っていた。ガスコンによれば、臨時収入のあったロクサーヌが肉料理を振舞うので、その代わり二人で買い物のお遣いへ行ってこいとの事だった。無論、ウェルテに断る理由は無い。ここ数日、嫌な事ばかり続いていたので、美味しい食事と酒で憂さを晴らすのも悪くはないと思ったのだ。

広場の大市まで歩く間、ウェルテは昨日自分を襲った災難を友人へ話して聞かせた。ガスコンは、ウェルテの経験したあまりにも物騒な話に言葉を失う。傭兵である自分にとってはそんな危険は日常茶飯事だが、堅気の仕事をしているウェルテがそこまで危険な目に遭うことになるとは想像もしなかった。

「お前、よく無事に帰ってこれたな……　やっぱり俺も一緒に行くべきだったな」

「ああ、そうだね……　それにしても、黒服のチビといい、青騎士どもといい許せない。次に何かあったら絶対に叩き斬ってやる」

ウェルテは眉間に皺を寄せながら唸るような声で言った。ガスコンは腕を組みながらウェルテの話を反芻してみた。

「気持ちは判るが、少し冷静になれよ。お前の言うその黒服のチビだが、なんでお前を、よりにもよってオストリッチの手下なんかに間違えたんだろうな？」

「そんなの、僕の知った事か！　こっちははじめから徴税吏だって

言ってたんだから」
　ガスコンはそこに引っかかっていた、どうもここしばらく自分の周り起こるきな臭い出来事には、どれも大商人オストリッチの名前がついてまわるような気がしてならなかった。それにウェルテが森で対峙したという黒服の男達の事も気になった。ガスコンは二日前にできた左手の甲の傷をさすった。なぜかこの傷とも無関係ではないような気がしたのだ。
　そうこうするうち、二人は広場の大市へとやってきた。もっとも混雑する時間とあって、主婦や商人でごったがえしている。とりあえず、肉屋の出店で上等な牛肉と羊肉を、八百屋ではいくつもの野菜を買った後、二人は交易商が集まる一角へと向かった。普段は高くて買えない調理用スパイスを買う為だ。肉料理にスパイスを応用すると、料理の風味が数段豊かになる。スパイスは遠く西方の異教徒達の土地でしか採れないため、この大陸の東方ではとても貴重な物だった。
　様々な香辛料が並べられた一軒の店で、ウェルテ達は肉料理に合うスパイスを調合してもらう事にした。ガスコンが銀貨を何枚も渡すと、商人は黒やベージュの丸薬のような干した実をいくつか秤にかけてから小さな小瓶に入れて寄越した。ガスコンはその小瓶を大切に懐へしまうと、二人はロクサーヌの待つ酒宿へと戻り始めた。
　帰り道、広場の一部分には黒山の人だかりができていて、二人の進路をふさいでいる。
「すごいな……　一体何の騒ぎだ？」
ウェルテは背伸びをして前方を見ようとし、ガスコンも首を左右に巡らせて前をのぞく。
「よく見ないが、大道芸人の一座が来ているようだ。このまま進むのは大変そうだぞ」
二人は広場を突っ切るのやめ、人を掻き分けて脇道を目指した。広場の端に近くなり、ようやく視界が開けてくると、そこにはいくつもの旅芸人の馬車が止まっているのが見えた。

「もうすぐ収穫祭か……」
それらは、収穫祭に合わせて見世物をやりにアグレッサへとやって来た旅芸人や移動劇団の馬車だった。彼らは毎年南からやってきてはアグレッサの収穫祭に合わせて見世物小屋や芝居小屋を建てて市民達を楽しませ、次に北方の街へと去ってゆく放浪の興行師達だ。芝居や見世物は数少ない娯楽の一つで、興行師のいるところには必ず市民が殺到した。
「芝居か……　去年はサリエリと見に行ったよ。面白い芝居だった」
肉と野菜の入った籠を抱えながら、公演予告の横断幕を見たウェルテはつぶやいた。ウェルテはお決まりの騎士道物語、サリエリは風刺の利いた喜劇が好きだった。
去年見た芝居はこんなあらすじだった。グライトのある聖職者は、いつも大聖堂へと通ってくる美しい貴婦人に一目ぼれする。彼は我慢できずにその貴婦人へと恋文をしたためるものの、フォルス教の聖職者は表向き恋愛厳禁なので、結局手紙を送る事ができないまま間抜けにも手紙を聖堂の廊下に落としてしまう。不運にも手紙は恐ろしい異端審査官に拾われ、教会中が大騒ぎ。その事は最高権力者である教主様の耳にも入り、結局、戒律に背いた罪でその聖職者は宗教裁判にかけられることになった。そして聖職者を誘惑したかどで件の貴婦人も裁判の場へと連行されてくる。最初、教主様はカンカンになって聖職者に火刑を宣告するが、連れてこられたその貴婦人を見るやなぜか急に慌てはじめる。裁判は進み二人は火刑台にくくりつけられるが、狼狽した教主様は罪人の最期の懺悔を聞く段になって、うっかりその貴婦人へ親しい者しか知らないニックネームで呼び掛けてしまい、周囲は唖然となる。その貴婦人は教主様の愛人だったのだ。教主様の『大罪』が暴露され、一同大笑いのうちに舞台の幕が下りるという荒唐無稽なドタバタ喜劇だった。噂によればこの脚本を書いた舞台作家は「前衛的すぎる文書を作成した罪」で異端宣告を受け、着の身着のままグレープスへ亡命したといわれている。

「そうだロクサーヌも誘って今度芝居を見に行こう」
ウェルテのその思いつきにガスコンは苦笑いした。
「別にいいけどよぉ……　あいつの好きな芝居は全部コテコテの恋愛劇だぜ。あればっかりはどうもなぁ……」
確かに女性連中はどこでも、喜劇や勇ましい騎士道物語なんかよりも色恋沙汰のメロドラマが好きだ。
「そうだ、ナイジェルも巻き込んで三人で説得しよう。彼がいれば芝居代も出してくれるし、きっといい席で見られるよ」
ガスコンは熟れてないオレンジをかじったような顔で首を振った。
「冗談じゃねぇ。判ってないな。あの男はそこらの女以上にゴテゴテの恋愛劇が好きなんだぜ」
渋い顔をするのはウェルテの番だった。
二人は街の西側の路地から広場を迂回して帰路についた。細い路地は高級住宅地の裏側にあたり、静かで人の往来も無い。
「そういやあいつ、アドリアーノ・オストリッチの家に滞在するって言ってたぞ」
「そう？　オストリッチの屋敷はもう少し先に行ったところだよ。そもそも、ナイジェルは一体何しに来たんだ？」
「さぁな、珍しい物が届いたとかでオストリッチにエスカルから呼び出されたと言ってたが……　金持ち同士のやることだ。どうせ下らない物でも買わされるんだろうよ」
そう言いながらガスコンは無意識に歯をカチカチと鳴らした。
ちょうど二人がオストリッチ邸の裏通りに差し掛かった時だ。塀に空けられた小さな裏口の鉄扉が、キキッと音を立てて開いた。
「もしかしてナイジェルだったりして」
ウェルテが冗談を言った。
「まさかな。普通、客が裏口から出入りするようなことなんて……」
塀の内側から黒いブーツとクローク、帽子の小柄な男が出てきた。
次の瞬間、ウェルテがガスコンを裏路地の陰へと押し込んだ。
「おいウェル……」

「静かに！」
ウェルテは自分も路地裏へ飛び込むと、頭からキャバリアー・ハットをとって用心深く通りを覗き込む。
　出てきたのは小さな布包みを抱えた小柄な男が一人、裏通りを用心深く見回してから北通りの方角へと歩き出した。全身黒ずくめ、黒いキャバリアー・ハットには緑の孔雀の羽飾り、右目のモノクルが夕日を反射していた。ウェルテが見間違えるはずもなかった。今日はスカーフで口元を隠しておらず、色白の顔はウェルテが想像した以上に整っている。ウェルテと同じく、スローチハットを脱いでその男の様子を伺っていたガスコンは小声で囁く。
「知り合いか？」
「さっき話した、問題のクソガキだ……」
ウェルテは怨嗟に燃える目で男の背中を見つめていた。ガスコンもその小男を見て表情を険しくする。
「なぁウェルテ……　信じらんないかもしれねーが、俺もあの小僧を知っているような気がする」
ウェルテが驚いた顔をした。
「顔や風体はともかく、俺は野郎の腰にある金のガード付きレイピアに憶えがあんだよ」
ガスコンは左手の包帯を撫でながら目配せした。
「とっ捕まえて話聞いた方が早そうだぜ」
「よし、あっちの十字路へ回り込むからそこで挟み撃ちだ」
ウェルテはそう言うと、ご馳走の詰まった籠を抱えながら裏通りを駆け出した。

　先回りしたウェルテは十字路の陰でその仇を待ち受けた。砂利道を踏むブーツの音が近づいてくる。ウェルテは相手の姿を確認すると、進路を塞ぐよう素早く道へ飛び出した。
「また会ったなクソチビ！」
黒服は一瞬身を強張らせて、ウェルテの顔を見た。さすがに驚いた

のだろうか？　目を丸くし、鎖で繋がれた右目のモノクルがすとんと眼窩から落っこちた。大切そうに青い布包みを抱えたまま、来た道を引き返そうとしたが……

「おおっーと、そこまで。ちょっと俺達とお話しようぜ」

背後からガスコンが退路を塞ぐ。

「さあて、まず何から訊こ……」

剣の抜かれる音がした。

「ウェルテ！」

黒服の反応は素早かった。布包みを地面に落すや身を翻しながら素早くレイピアを抜き、鋭い突きをウェルテへと繰り出した。危うくウェルテは後ろのめりに飛び退き、尻餅をついた。籠を抱えたままだったので玉ねぎやジャガイモが砂利道へと転がった。慌ててガスコンがレイピアを抜いて突くが、その小男は盾がわりにクロークをひるがえしてそれをはじく。

「問答無用か！」

ウェルテは完全に頭に血が上った。ウェルテは体勢を立て直すと勢いよくレイピアを抜いた。

　ウェルテは師であるレスター・ヴァンペルトの教えとおり、決して最高級品とはいえなかったが、買える中で最良のレイピアを腰に下げていた。ウェルテの剣はレイピアにしては丈夫で切れ味も良くほとんどしならない剣で、比較的カット・アンド・スラスト・ソード（レイピアやスモールソードより刀身が幅広なので一般にブロードソードと呼ばれたりもする）に近い剣だった。

『いいかウェルテ。街の中で、規則に縛られながら身を守る事はとても大変な事だ。限られた物で戦わねばならん。だからレイピアは肉厚で丈夫な、決して剣先がぶれない物を選ぶんだ。そして、たとえ斬るものではなくとも、日頃から必ず根元まで刃をよく研いでおくことが大切だ。その刃の切れ味が、敵をより深く突き刺し、場合によっては相手を擦り斬る時にその力を発揮するぞ』

一方のガスコンは今日、持っている武器のなかでは最悪の物を手に

していた。元々、レイピアは一般人の護身具としか考えていないので、限りある予算のほとんどは良質のカットラスやソードブレイカーを買うために使い、飾りと割り切って買ったこのレイピアは竹光よりましという程度のなまくらな安物であった。
――ましな剣を持ってくるんだったぜ……
ガスコンは内心そう毒づきながら剣先を黒服の顔に向けて構えをとる。ウェルテも腰を落とし腕を軽く曲げてレイピアを突き出し、攻撃態勢に入る。
　またも攻撃を始めたのは黒服の方だった。手首のスナップをきかせてウェルテの剣を浅く弾くと同時に半歩踏みこんで、剣先でウェルテの上半身を狙う。下段から上へレイピアを構えていたウェルテは難なく護拳でその刃をはらう。そのすきにガスコンが左横から襲うが敵もさるもの、クロークの陰から飛び出した左手のマンゴーシュでガスコンの剣を受ける。マンゴーシュにしては恐ろしく刃幅の狭い細い短剣だった。三者すぐに間合いを取りなおすために散開した。
「ウェルテ、用心しろ……　強いぞ」
ガスコンは右腰のソードブレイカーを引き抜きながら言った。ウェルテも無言でうなずく。
「やはり謀ったか、金の亡者ども……」
昨日と同じく澄んだ細い声でうめきながら、黒服の小男が二人を交互に見据えた。右手の金に輝く複雑なリングガードのレイピアでウェルテを狙い、左手の細いマンゴーシュでガスコンを牽制する。
「亡者は貴様だ、この人殺しがぁ！」
怒り心頭のウェルテが大きな踏みこみ、深くレイピアを相手の喉めがけて突き込んだ。敵は両手の剣を前で交差させて、力一杯にウェルテの剣を自分の体からそらす。ウェルテは狙どおり、相手と間合いが縮まった時を見計らって右腰のマンゴーシュを抜きざまに切りつけた。黒服は背後へ身をそらして辛くもその斬激をかわすが、背中から漆喰とレンガの石壁にぶつかった。

身を引くウェルテと入れ替わるように左からガスコンが突っ込む。黒服の小男はまたもガスコンの剣先をマンゴーシュで封じる。残る片手のレイピアで上段からガスコンの頭を打とうするその刃を、ガスコンはマンゴーシュで受け止めた。二人は一瞬両手の剣同士で組み付いたような格好になったが、一瞬後ガスコンは強烈な蹴りを相手の膝へと見舞った。黒服はひるんでバランスを崩すが、すぐに壁を背にしたまま構えを正してウェルテ達を牽制した。

――盗賊にしとくにはもったいない腕だな

腕のいいガスコンとウェルテの二人を相手にここまで粘る黒服を前に、ガスコンはそう思った。だが、いつまでもこうはしていられない。ウェルテがフェイントのように、剣で軽く相手の護拳を狙って打つ。その一瞬をガスコンは見逃さなかった。

「ウェルテ！」

なまくらレイピアでそれをやるのは不安だったが、合図の声と共に左肩から大きく振りかぶった剣を一気に横へ振り切る。狙いすました打ち込みが黒服の左手にあるマンゴーシュの刀身へと叩きつけられた。本来武器にするよりも、くわやすきなどの農具をつくる素材に向いているリザード鋼でできたレイピアが敵の手からマンゴーシュを跳ね飛ばす。黒服は一瞬狼狽した表情を見せた。ウェルテは左半身を前にし、直線型クロスガードのマンゴーシュを突き出した。剣先で下から円を描くように相手のレイピアの刃を絡めて下方へ押しつける。その時には、右上半身の方へと引きつけた右腕のレイピアは敵の眉間を狙っていた。

「死ねぇぇぇ！」

サリエリの仇とばかりにウェルテは右腕で渾身の突きを見舞った。黒服はそれを避けられないと悟ったのか左腕で顔をかばい身を低くした。ウェルテの剣が黒服の腕をえぐり、そのまま額をかすめて頭の帽子を跳ね飛ばした。黒服のレイピアが砂地に落ちた。

「おい……　こいつ……」

刀身がくの字に折れ曲がってしまったレイピアを構えたままガスコ

ンは絶句した。ウェルテに至っては口を開けたまま声も出ない。黒服の頭から脱げかけた帽子が落ちると共に、帽子の中にたくしこまれていた艶のある黒い髪がまるでマントのように広がった。
「お、女だ……」
血に染まった剣をその女の首に突き付けながらも、ウェルテはガスコンと顔を見合わせる。
　その黒衣の女は、苦痛のあまり刺し貫かれた左腕を抱えてしばらくうずくまっていたが、悔しそうに口元を歪めてウェルテ達を睨んだ。剣のかすった額からはうっすらと血が滲んできたが、二人を見上げる黒い瞳には怒りと憎悪の火が灯っている。程好くとんがった顎、繊細な鼻筋、もし男装ではなく剣も持たずに街を歩いていたらどんな雰囲気なのだろう？　ウェルテは先ほどの怒りもよそに、一瞬そんな余計なことまで考えた。が、急に自分が、昨日今日と同年代もしくは年下かもしれないこの若い女に剣で後れを取った事に思い至り、やり場のない苛立ちが沸き起こってきた。それに、この女はサリエリの仇かもしれないのだ。
「オストリッチ……　やはり汚い奴……」
　女は絞り出すような声で唸った。苦痛のためか、それとも悔しさのためか、女はその双眸に涙が溜まるのを必死にこらえながら二人を見据えている。ウェルテとガスコンはしかめ面になって顔を見合わせる。
「だからこっちはただの徴税理だ！　昨日も言ったはずだぞ！」
「そもそも、抜け荷の馬車を襲う盗賊の汚ねぇもきれいもねーだろ……　もっともお前の身なりや剣筋は、とても盗賊とは思えねぇけどよ」
「まだ言うか下衆ども……」
女は小声で毒づいた。
　その時、ガスコンは何を思ったのか急に背後を振りかった。
「どうした？」
ウェルテの問いをガスコンは手で制する。するとウェルテの耳にも

砂利を踏む多くの足音が聞こえてきた。それはこの十字路の三方から聞こえてくる。
――まさか、この女の仲間か？
敵はこの女一人でないことは昨日から判っている。ウェルテは緊張した面持ちで女の首筋にレイピアの剣先を突きつけ、周囲をうかがった。
　細い街路の陰から剣呑な雰囲気の男達がゆっくりとした足取りで姿をあらわした。
「おい、抜け駆けしようとしている奴らがいるぞ」
先頭にいた、レイピアを腰にささずに鞘ごと肩にかついだ男が言った。こういう粋がった格好をした者は街の北にある繁華街でよく見かける。昨日森で見かけた者達とは明らかに素性の異なる、一目で三下やチンピラと判るなりの男たちだった。
――何だ、こいつらは？
ウェルテは警戒しながらもガスコンの顔を一瞥した。見ると、ガスコンは口を閉じたままもごもごと歯ぎしりして、一回だけしゃがんでいる女を見た。
――まさか、この女……
ガスコンは舌打ちして新手のチンピラ達へと視線を戻す。
「いよう兄ちゃん、こんな所で会うとはな」
聞き覚えのある不愉快なダミ声が、ガスコンの耳に届いた。ガスコンは自分の予感が当たっていそうな気がしてうんざりした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8596v/

止めのファンデブ

2011年12月18日10時52分発行